

164
Sa95

164-Sa95



1200500727410

澤村幸夫著

支那民間の神々



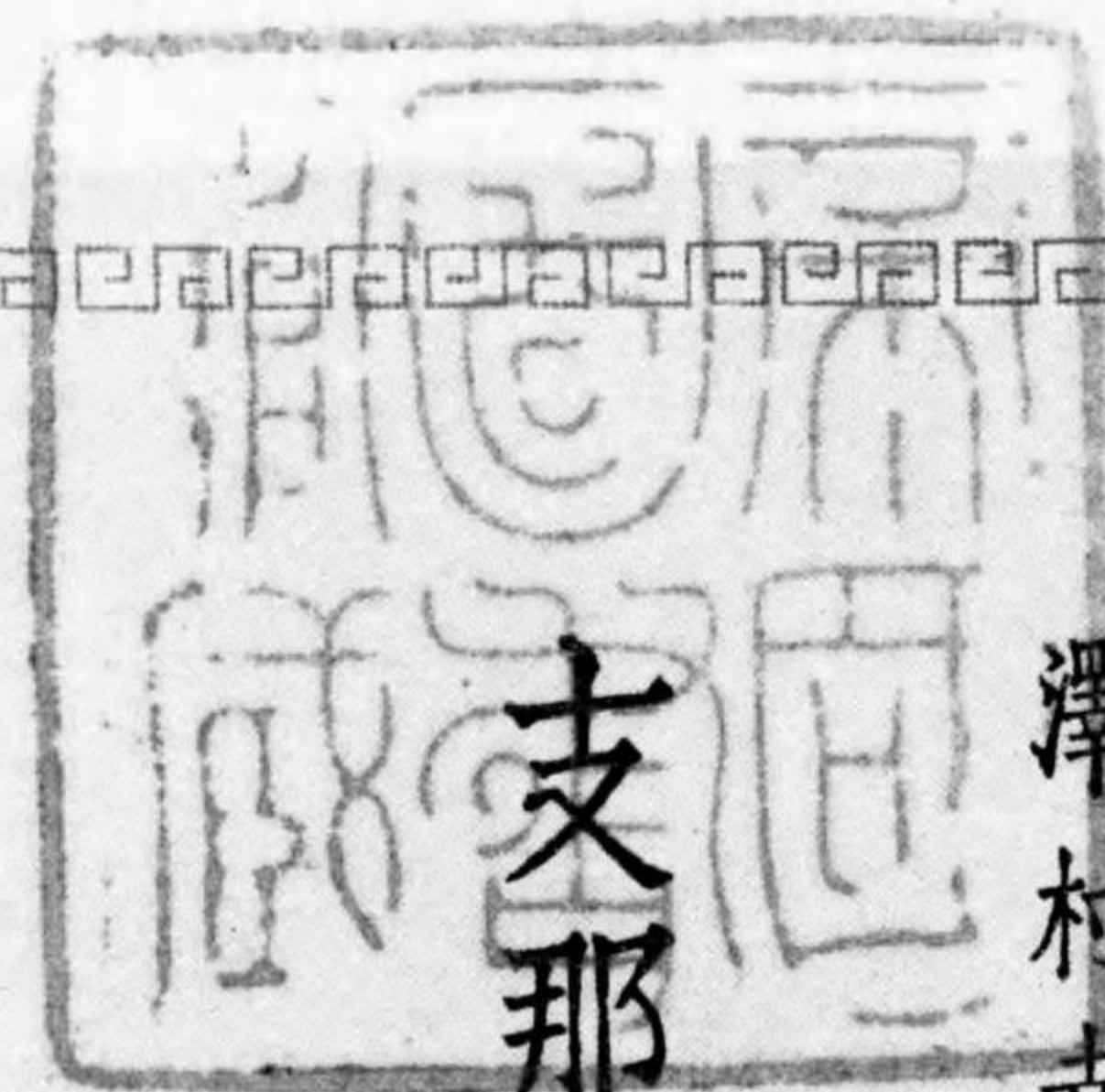
象山閣



始



164
SA95



澤村幸夫著

支那民間の神々

象山閣刊



920
168

序に代へて

中華民國の父孫文は、基督教々育をうけた人であつたが、後年には、それらしい點は微塵もなかつた。生涯を科學萬能主義者として押通した。同志、門弟などと雜談する際には、世界に誇るべき文明をもつてゐる支那が、今日のやうに白人被壓迫の國となり下つたのは、君權を神權と同一視した儒教の罪でもあるが、しかし、科學の進歩を碍げ、人を愚にし、迷信に導いた道教の害毒の方がより大である。支那を濟ふものは科學の外にないと論ずるのであつた。しかも、晩年、一切の事が曾て豫期したやうに甘く運ばず、その一方、健康もまた漸く衰へかけて來てからは、科學萬能主義者として似合はしからぬ物の考へ方も、ちよいちよい出て

來た。それは、晩年ではないが、第一革命成り、全國鐵路總辦の肩書において、鐵道や、港灣や、開墾事業などの卓上計畫に熱中してゐるころであつた。彼は舟山の普陀山に視察に出かけたことがあつた。名だたる觀音の靈場で、寺でうづまつてゐる島山であるが、彼はもとより進香禮拜のために來たのではない。鐘の音、波の音、讀經の聲の交響樂を空耳に、ざくざくと砂を踏んで、とある島道の角にさしかかると、先頭に立つてゐた孫文は、兩側に列をなして大小幾十人の坊主の群が、うやうやしく歡迎の意を表するのを見た。彼もまた禮をかへした。が、彼はすぐその後で、何だか變だなど氣がついた。で、隨行者たちをかへりみて、出迎の坊主たちを見たかどきいた。誰ひとり怪訝な顔をしないものもなく、見たと答へるものはなかつた。さう見えたのは、多分、彼

の頭の加減であつたらう。けれどもこの事あつて以來、彼には宗教ならずば解決し得ざることもあるのを信するやうになつた。道教もあまり腐さなくなつた。彼はこの事について、短い手記をのこしてゐる。この夏「中華日報」にも轉載されたことがあるから、それを讀んだ人もあらう。

總じて支那の人々には、相當に名を賣つた人で、しかも、新しき人と信せられてゐる人で、いかにも支那的な一面を有する人物が少くない。外交家伍廷芳は西洋の降神術を實驗したとやらで、自國の巫覡道の肯定者だつた。汪兆銘とともに孫文の雙の腕と並べ稱せられた胡漢民は、逝かんとする二三年前から、全く肉を遠ざけて菜食のみ攝つてゐた。一時、新交通系の領袖として勢威を張つた葉恭綽は、上海に引つこんだ後は、一箇の居士、一箇の善

士となりすましてゐる。戴天仇も、一度、宜昌で投身して更生した後は、革命とは似もつかぬものによつて安心立命してゐる。同じ革命史中の人なる李烈鈞は、共産軍が彼の郷里の江西を搔きまはした後、再び上海に出て來たが、その時の彼は、何と、數珠を手にしてゐる彼であつた。ここに擧げたのは、孫文の同郷、もしくは縁故を有する少數者に限つたのであるが、それにしても、意外な人が、意外な信仰に生きてゐる實例とはならう。誰もさうだとはいへないが、支那の人は、政治家にあれ、軍人、實業家にある程度、ある程度の功名に満足し、その膝下に孫の二三人もまつはる年齢に達すると、世間的地位と名聲などには、くるりと脊を見せてあるひは讀書、あるひは念佛、あるひは善士的生活に入るものが少くないやうである。安徽派の段祺瑞、直隸派の吳佩孚など、

よき實例だ。これは、あるひは、支那人おしなべて、生れながら道教的なるものをもつてゐるからといへるかも知れない。

問へば必ず儒教の國なりと答へる。孔子を生み、孔子教を國家文教の本としてゐたのであるから、この答へは正しい。やや突きこんで問へば、儒・佛・道三教の並行する國だと答へる。これも間違つてはゐない。上流に儒教、中下流に佛道二教が普及してゐるのは事實である。けれども、支那人の實生活を知る人であるならば、表向きの官家の式典などを除いては、その他の總べてが、儒・佛・道三教相互の歩みよりて、著るしく道教の臭ひが濃く且つ高いことを認識せざるを得ぬだらう。かの「三教同源説」は、大體、六朝時代に始つたとされてゐるが、現代支那においては、疾くの昔の何世紀前かに「説」の域を突破してしまつてゐるので

ある。いはゆる「三武一宗」の災厄なども、佛教渡來の初期にはあつたのだが、その後は、おのおの原始的な特異性を失ひ、儒教もまたその大渦に捲きこまれてゐる。捲きこまれないまでも、飛沫を浴びてゐる。だから、現代名流の信佛といふのも、アルフレッド・フォルケが指摘してゐるやうに、彼等は儒・佛・道教を一身に兼ねてゐる佛教信者なのだ。ある西洋の支那學者は、この故を、本來、支那人は宗教的に寛大であるからといつてゐるが、確かに一面の眞である。又、現代人の林語堂は、儒教は都市における宗教。道教は田園における宗教。検査された殺菌牛乳は安心して飲めるが、田舎でしぼり立ての温いのを、ぢかに桶から飲んだら、二度と殺菌牛乳を飲む氣にはならないと、軽い比喩を用ゐてゐる。けれど儒教は、窮屈すぎ、行儀がよすぎ、しかも怪力亂神

を語らぬところが、かへつて人間としては物足らぬのである。佛教は本來外來のもの。原始的なそれでは支那的でない。だから、その支那的なる點を高調して、うまく道教と抱合はさしたのであらう。四川の酆都に道教的地獄を創作し、閻羅王まで拵へあげたところを見るがよい。

曾て幸田露伴は、李太白の詩篇ににじみ出てゐる高い感情は、道家的氣味風韻でなくて何であらう。蘇東坡や、陸放翁の詩にも道家の香がある。「水滸傳」は、劈頭第一に、道家の神祕を點出して、百八魔君を走らせ「紅樓夢」は、主人公賈寶玉が赤足に雪を踐んで大踏歩し去るところを歸結とする。道家の味でなくて何だ。演劇には、滑稽なまで道教的臭氣のするものが多い。民間の年中行事を見よう。かの上元華燈の節からはじめて、道教信仰の

意をもつものばかりだ。民衆の信仰にいたつては、符呪・醮祭・
 祈禱・禳祓の類、それ等に關する信説、いづれか道教から出ない
 ものがあるかといつてゐる。私は無條件で、この言に同意する。
 「支那民間の神々」は、道教國支那の低級ではあるが、廣く普
 く行きわたつてゐる信仰を記述したのである。

昭和十六年十一月三日

大阪四天王寺南門外にて

澤村幸夫誌

目次

比 干——文財神……………三

元旦の接神……四方を拜す……文武財神……殷の三仁……紂玉色に溺る……王妃の本
 性……心を剖いて見る……大衆讀物の影響

關 羽——武財神……………九

僻村にも關帝廟……歴代の封號……「三國演義」の明文……「佛祖統記」に見る神靈示現
 ……「五雜俎」の靈驗記……善書の中の「覺世眞經」……現在の玉泉山……足利尊氏の崇
 祀

呂洞賓——純陽子……………一六

八仙中の一仙……製墨職人の祖師……紅卍字會の代宣者……世系・經歷・才識……宋の眞宗の夢に入る……雜劇傳奇による大衆化……『太微仙君功過格』……靈籤……醫巫
閩山遺蹟

呂 尙——太公望……………三

呂尙の世家……周の西伯を釣上げる……彼の傳説上の地位……比干・關羽も如かず……彼を神異にした道書……『太公在此』のいはれ……蒙疆に行はれる四説……泰山の女さへ憚る

碧霞元君——娘娘……………二元

娘・爺・耶・孃・娘子の稱呼……娘娘・孃孃・后・奶・孀の意義……天后聖母と相埒する……滿洲・北支那の廟の數……東嶽大帝の玉女説……黃帝の七女説……華山の玉女説……民間の凡女玉葉説……倭臣王欽若の手品……玉女神話は古し……眼光娘娘……

子孫娘娘……娘娘に異稱多し……趙公明の三女説……「封神演義」では三神仙……母姓崇拜の道教化か

唐明皇——老郎神……………三七

樂屋裏の神龕……蘇州の老郎廟……老郎の異説……秦淮の妓女の老郎會……墮民が祀る老郎菩薩……新婚者の祝福にも……玄宗は樂の天才……入神の二作曲……樂に於る功績……北京梨園の九皇會……上海妓家の雷尊齋

文昌帝君——梓潼帝君……………三五

天下到處に文昌祠……盛んなる文昌會……帝君閱歷……道家の附會に出づ……星の文昌宮……陰騭文五百四十四字……確かに一名文……七曲山の文昌宮

竈 神……………五二

わが平野神社……天王寺の庚申堂……最も普遍せる祭竈……竈神とは何……竈神の職分……祈念の辭と詭計……祭祀の由來……婦孺罵聲を慎む……竈神畫像

布 袋 — 哄笑佛 五

西洋人の愛好……Laughing Buddha……英譯附の賽錢箱……事變前の龍華寺……彌勒化身説……現身は岳林寺に……「傳燈錄」の記事……出語不定にあらず……我國の七福神……大量を徵象する……譏人の辭としては

西王母 — 王母娘娘 六

「喫茶事魔」とは……魔から神仙への例……北京の蟠桃宮……龍門派に多い王母祀殿……王母は授兒育兒の女性神……玉函山の三教堂……使はしめの三足鳥……母性神となるまで……「穆天子傳」……「列仙全傳」の記事……魅惑的な「漢武内傳」……「隨園隨筆」に引ける數説……「山海經」の記載……半神半獸の女怪

天后聖母 七

娘娘・娘娘以上……文獻……「莆田縣志」に見える事蹟……歴代の尊崇加封……女巫なりとの説……種々なる靈顯……蔡姑婆とは別人……「長崎夜話草」の一異説

臨水夫人 八

子を欲する女心……授兒娘娘信仰……道佛混淆……娘娘・臨水夫人……年二度の祭祀……「搜神記」所傳……脱胎祈雨……つづの間にか産神化……「請花」

樟 柳 神 九

上方山の五通神祠……「聊齋志異」の記載……禁絶は一時のこと……進香絶えず……借陰債・求横財……私巫もまた遠近から……又の名道姑……忌はし氣な木偶……能く言語し能く跳躍する……宿れる靈即ち「小鬼」……樟柳は商陸なり……跳神にあらず巫札にあらず……筆記類に見える靈應談

十二生肖神…………… 14

翻服した肖禽……………一體毎に人の名を……………類似の擬人像……………十二支・五行・十干……………民間通用の曆……………「通書」に支配される……………傳統の力強さ……………「梅花心易」等の迷信助長……………「法苑珠林」の引用

范喜良・孟姜女…………… 101

貫休の詩の句……………宋元の南戯にも見ゆ……………山海關の姜女廟……………夫妻は北人か南人か……………「仙女寶卷」では蘇州人……………專制君主秦始皇……………想像も及ばぬ夫役……………張籍の築城曲……………上海城壁の石像發見……………無錫における血祭の實例……………紹興應宿閣傳説……………黃河工事傳説

二郎神…………… 113

南北隨所に廟あり……………白雄鶏を供へる……………二地方誌と「三教大全」との記載……………奉祀と

劉猛將…………… 114

封號……………隋の趙昱說……………李冰說と灌縣の二郎廟……………離堆の大觀……………峩眉と並稱される青城山……………史に見える李冰の功業……………附會された神怪談……………冰と江神との死闘……………「四川總志」の記事……………遺物と稱する石犀……………地方官の無知……………盛んなりし宋代の祭祀慈覺大師の乞糧狀……………晉末の蝗害慘狀……………冢も人も蝻に啗はる……………爆撃機以上の轟音……………汽車爲に運轉不能……………神威を藉る心理……………北支那の蟲王爺……………蘇州の猛將廟……………盛んなる祭事……………宋の名將劉錡說……………元將承忠說……………天津の蚂蚱神……………「津門百詠」の一首

張天師…………… 115

道統ここに六十三世……………江南における道教……………公稱の道士と信徒……………明以後の衰運……………真人の估券に關せず……………借家住居の張天師と語る……………上品でない隨從者……………繼承の三種の「寶」……………共產軍の劫掠……………親筆の護符を頂く……………「法術の奧妙説き難し」……………不

吉な俗諺……龍虎山天師府

祀 孔——孔子祭……………一四三

孔子教の生命……祭祀危くも續く……國家祝祭日確定……釋奠・文廟の稱を廢す……
祀孔の由來と變遷……歴代諡號……現行禮制

軋神仙——會神仙……………一四六

藥店沐泰山に下れる女仙……陸稿薦に出現した李鐵拐……何故に神仙に假託する……
蘇州呂祖廟の醮會……畸形乞丐等の進香……北京白雲觀の會神仙……おそろしき人出
……童話然たる話ばかり

石 敢 當……………一五〇

橋南谿の見解……石占の具なりとの説……支那における通説……「輿地紀勝」・「續古
叢編」の二記事……各地に見るもの……徐聞縣公署の石碑……福建南部の傳説

祝 由 科……………一五七

荒誕極る大法螺……紅廟に見た一先生……黃帝軒轅氏相傳……祝由は由弭なり……
襦・袖にも作る……本場は湖南辰州……清の趙翼の體驗

朱 天 素……………一七三

四十餘日の長齋……太陽神生日・朱天君生日……歳暮に祀る南朝聖君……明朝追念説
……明末諸王の最後

臘 八……………一七六

わが國での習俗……『らうはつ』の行事……臘八接心……溫槽粥製法……斷食七晝夜……
……慧可斷臂會……支那に於る臘八……臘の原意義……釋尊記念の日にあらず……今は
施捨結縁のために……京津の臘八豆・臘八粥……江南の佛粥……この日だけは素食

相——相手術……………一八四

相による民族……相風・占風の器……吳子胥の氣……印文にも相あり……相手術……
手は性能を意味す……漢に指紋法あり……手に足に紋様……陳平・曹夫人・斐休の例
……「相手板經」……手の血の神秘……「訣」といふもの……不祥な女人の手

殉

情

支那に心中なしとの説……我國のいはゆる心中……人色過ぎたる證據……色慾貪慾熾
んなるままに……相對死・雙斃・并命……並蒂花の故事……君山の湘君廟……祝英臺・
梁山泊……韓憑の妻の故事……女詩人柳如是

讖緯書

豫言の魅力は上層にも……西の天文曆數と東の星占機祥……讖緯の學とその起原……
讖緯の意義……「推背圖說」……「萬年圖說」……「鐵冠數圖」……「燒餅歌」……「藏頭詩」
劉伯溫・李淳風・袁天綱……いづれも偽託

木魚書

廣東人の發展……硬碰硬と頂刮刮……低級な二種の歌曲……木魚書の變遷と内容……
拜月の夜の『月光唄』……濫費と迷信との中秋節……龍舟歌を賣る盲妹……節拍高低は
内容に應じて……翻譯するは難し……木魚書だけで二千種以上

畚民

浙江新志・五雜俎などの記載……畚は誤り……分布區域……人口蛋民に亞ぐ……異様
な女の髪飾……山韃・三宅などの異稱……姓に冠する『汝南』の二字……遠祖に關する
傳説……ウッツ氏の聞書……祖像・黃傘・矜持……女權・婚嫁・『調新郎』

蛋家

民族研究難……廣東の太古民族……人種複雑せる原因……旅客の目にもつく……曲

蹄・裸跪・拜題……蛋家異稱……職業……范蠡の後裔と自稱……蛋は艇なりとの説……
林邑蠻説……宋以前から蠻民扱ひ……特異な習俗……蠶と彼等……奇怪な甲殻類

卷末に……………三四

支那民間の神々

文張り圖の神

此ひ

干かん

— 文財神



悠久な歴史と文化をもつ支那人は、南北おしなべて傳説と舊慣とを尊ぶ。煩しき行事をも敢へて辭せぬ。年末から年首にかけての儀式の多いこと、わが國の御幣ごへいかつぎなるものも恐入らう。

除夜も更けて、いよいよ新歲に入らんとする時間ともなれば、一家の守護神たる神々が、天降られるとあつて、香を焚き、赤い蠟燭をともして、その家の主は衣服を改め、手を清めて接神の儀式を行ふ。それがすむと、直ちに門を閉め、盛んに爆竹を鳴らす。門を閉づる時は、赤い長條の紙に『封門大吉』と書いたのを門の扉の合せ目に斜めに、もしくは片側の扉の真中に縦に貼りつける。爆竹を鳴

らすは、神々を迎へたる後、悪鬼邪氣を追つ拂ふ意である。東の空、やうやうに白めば門を開く。開くにあたつては、めでたい年が、今年もわが家に來らんことを念じ、門から屋内に入るにあたりては、新禧・新禧、もしくは『開門大吉』と大きな聲でよばはる。それから、その年の曆こよみによつて、喜・貴・福・財の四神の在す方角に向つて線香を焚き、一家の好運ならんことを祈る。四神の中にも、喜神は特に重視される。よし他の三神を略することありども、喜神だけは必ず元旦に拜する。

右の儀式は、煩簡の差はあれ、各階級を通じて行はれる儀式であるが、讀書人仕官の家では、四方を拜するにあたりて、財神の代りに孔子を拜する。又、ここに財神といふは、四神の一たる財神でなく、星相家の『財帛宮』のことだらうとの説がある。確説はないやうであるが、方位は亥みにあたる。

二日の清晨、滿洲は五日、一般商家は、財神を迎へる。福の神を迎へることで

あれば、同じ儀式、祭祀であつても、祀る人の性根の入れ方が違ふ。この福の神の財神は、人の職業によつて神の方もちがつてゐるが、商家はおしなべて文武財神か、しからざれば五路財神である。文武財神は、關羽と比干の二位で、傳説によつて飾り立てられた神でもあるが、共に史上に名をどごめてゐる實在人物である。一方の五路財神の主神たる玄壇神げんだんじんが、道教臭ふんぶんたるとは大いに趣を異にする。

關羽は、三國の蜀の大將。忠と義と俠との三點を具備した人物であつたことはここに細説を必要としないだらう。財神の中では、邪財神に對する正財神であり文に對する武財神である。一方の正財神にして文財神たる比干もまた正義の士で孔子をして『殷に三仁あり、微子びしは去り、箕子きしは奴となり、比干は諫めて死す』と嘆せしめたほどの人であるから、これを關羽に配して文財神とするは、極めて適はしいといへる。けれども、この比干が、かくまで、支那大衆の信仰をあつめ

るまでには、關羽における三國志演義や、それを仕組める芝居や、あまたの傳説などが手傳つてゐるやうに、彼にもまたそれがある。

比干は、殷紂王の至親で、また忠直の臣であつた。紂王といふは、義を損ひ善を殘ふの意の諡で本名は受辛といひ、帝乙の第三子で殷（商）の二十八世の帝位に即いた。人となり聰明にして勇猛才力人に過ぎたり。手によく禽獸を捉へ、身はよく駿馬に跨れり。智は人の諫を拒み、言は非をも理とするの辯舌ありとあるから、生れながら闇愚な帝王でもなかつたらうが、冀國侯蘇護の女で、美色雙ぶものなく、しかも殘忍極る姐己を後宮に容れてからは、彼女のために摘星樓と名づくる十丈の高樓を築き、日夜、淫聲邪樂を樂しみて政事を見ず、正宮の姜皇后を墜死させ、太子殷郊を流竄し、薑盆の刑とて蛇蠍蜂蠆などを満たした坑内に女を裸にして投げこみ、毒蟲に咬み殺させたり、炮烙の刑とて、銅柱の内部に熱火を煽んにし、外には脂膏を塗つたものを人に抱かせて焼き殺したり、或は酒池肉

林を設けて、その間に宮嬪どもに淺ましい戯れをさしたり、ありとあらゆる淫虐的遊戯に耽り、遂に太公望の姜子牙を參謀總長とする西伯侯周の武王のために滅されたのである。姐己は「通俗列國志」などの物語に従へば、金毛粉面の九尾の狐が、恩州の館驛において、彼女が睡れる榻上で、その精血を吸ひ盡し、魂魄を絶ち、しかる後に彼女の軀殻に入りかはりたるもので、人間でない妖獸の精であつたといふことになつてゐる。そして比干は人臣たるものの責めなりとて、死を以てその亂行を諫止すべく、數十個條を具したる表を上り、紂王の怒りに觸れた際、聖人の心には七つの竅あり、試みに比干が心を剖てこれを見給はんは如何といふ姐己が言に従ひ、ついに無慘な刑戮に遇つた仁人となつてゐる。これだけでも、西曆紀元八百年前の半歴史時代の傳説として、支那民衆に面白がられさうなのに、「封神演義」が、尻ツ毛を出して前後不覺に眠つてゐる姐己を見て、比干早くも彼女の本性を知り、紂王を諷するために狐の皮衣を献上したり、太公望の授

けた呪符じゆふによつて、心臓を剋くり取られた後も、平氣で馬に騎つて午門を退出したり——遂には『無心菜』といふ野菜をかついだ農婦の來るに會ひ、呪符たちまち效顯を失ひ、比干は死することになるが——面白い上に、面白くしてゐるから敵かたはない。文財神比干の仁義に對する支那民衆の人氣は、蓋しこの邊からといへるかも知れぬ。

關くわん 羽う — 武財神

三國の蜀の大將關羽ほどに、支那民衆の尊敬と信仰とをうけてゐる神はない。「支那村落生活」の著者のアーサー・スミスも、最も普通に存在する二つの廟は土地廟と關帝廟とである。數萬の村落は、この二つの廟で満足してゐると、山東の僻邑における關帝廟の普遍を記述してゐるが、それは山東ばかりのことでもなく、南北支那を通じてのことでない。支那人のあるところ、南洋の島々においても、關帝は必ず祀られ、願ねがひ事があれば祈念される。それも商家が、殷いん時代の忠臣であり、義人であつた比干ひかんを文財神として、關羽をそれに對して武財神とするばかりでなく、讀書の士も、武人も、慈善家も、眼に一丁字なき最大多數の民衆

も、齊しく仰いで神となすのである。宋以後、しきりに彼に對して封を加へ、崇惠公、武安王とし、明に協天漢國忠義大帝とし、さらに三界伏魔神威遠震天尊とし、近くは民國に入りて岳飛と武廟に合祀し、國家的祭祀を擧げることにしたのも、何等異とすべきではない。

關帝信仰が時代を逐うて、かくまでとなつたのは、いろいろな理由があらう。けれども、主たる理由としては、正史が傳ふる彼の道義的な人格よりも、むしろ演義、戲劇、筆記などに現はれた靈驗談の類が、かへつて大きな影響を與へてゐやう。建安二十四年十月、吳の孫權のために謀られ、襄陽に敗れて當陽に向ふ途中、ついに章郷において捕へられ、その子の平とともに臨沮において斬られた後、彼の魂魄が、玉泉山の普靜禪師の前に現はれ、因果應報を説かれて大悟する。「三國志演義」の如きは、その代表的な一である。山上に一老僧あり、法名普靜原と是れ汜水關鎮國寺の長老たり、山明かに水の秀でたるを見て、ここに就いて

草菴を結びて坐禪すと説き出して、一夜、空中に人あり、大いに呼んで曰く、わが頭を還へせと、普靜仰いで諦視すれば、只だ見る一人赤兎馬に騎し、青龍刀を提げ、左に一白面の將軍あり、右に一黒臉虬髯の人ありて相隨ふ、普靜その關公なるを認め得て、手中の塵尾を以て、その菴の戸を撃つて曰く、雲長安くにありや、と呼びかけ、昔非今是を論ずるを休めよ、前因後果、彼此ともに爽かならず、今、呂蒙に害せられて、我が頭を還へせと大呼す、然らば則ち顔良以下衆人の頭は、又た將さに誰れに向つて索めんと、關公恍然として大悟すと結んでゐる演義の一段の妙文は、人心に入り易きこと、正史や經史の比ではないのである。もつとも、關羽の神靈が、この山に現はれた物語は、天台智者大師が初めてここに到り、山中の一地を拓いて道場を建立せんとし、婆々として偃蓋をなせる大木の洞中に入り、跏趺坐入定してゐると、一日、天地忽ち晦冥、風雨怒號して、種々なる妖怪變化が、立ち交り入り交りて大師の前に現はれた。大師毫も懼色なく、一七

日を過した。と、その夕、雲開き月明かとなると、威儀王長者の如くにして、美髯にして豊厚なると、冠帽にして秀發なるとの二人が現はれ、大師に敬禮して自ら關羽なりと陳べ、われ死して餘烈あり、この山の王となりぬ、大徳、道場を建立せんとならば、ここを去ること遠からずして、山の形覆船の如く、その土深厚なる處あり、弟子まさに子の平とともに、寺を建てて化供し、佛法を護持しまゐらせんと告げ、大師の安禪七日なる間に、棟宇煥麗なる一寺ができてゐたと、「佛祖統紀」に見え、智者大師の荊州に至れる年を禎明十二年十二月と記してある。この神靈談も佛教徒にとりては、民衆における「三國演義」と同じ作用をしてゐないとはいへない。

筆記、隨筆の近代人の手に成れるものの代表的なるは、明の謝肇淛の「五雜俎」であらう。著者は、著者の友人の張叔弼なるものが、福寧州に倭寇の擾ぎがあるのに先ちて、神像が三日にわたりて動きつづけたのを見たことを記し、萬曆のあ

る年、彼自らも、神像の頂を踏んまへ、無禮な言を吐いた一工匠が、間もなく仆れて死んだのを實見したと記し、さらに觀察張堯文なるものが、桃源に至りて病革りたるを、その兄が關帝祠中に移し、哀禱七日を経ると、死者また蘇つたことをも、併せて筆記してゐる。

通俗道教の善書の一に、關帝聖君の名に僞託した「覺世真經」の一卷があり、陰騭文などともに、科擧の行はれた時代はいふに及ばず、科擧の廢れた今日も、なほ一經典として念誦されてゐること、また確かに關羽を民族神化せる動力である。覺生真經は、太上感應篇の原始道教的なるに比べては、著しく儒教的で、且つ實際的であり、陰騭文に比べては、彼の佛教臭濃きに對して、此れは佛教臭やや淡いが、節義の貴ぶべく、神明の鑒察のいたらぬ隈なく、淫を萬惡の首、孝を百行の基とし、若しわが教に負かば、請ふわが刀を試みんと、武人らしく又關羽らしき文字を加へてゐるところ、又一篇の名文であり、實踐に容易な通俗道徳

律でもある。かかる善書と演義小説の類が世に行はれる限り、蓋し關帝崇拜は已む時はない。

玉泉山は湖北の當陽にある名山である。寺の正門に題して『三楚名山』とあるが、決して溢美ではない。古への雲夢の澤が、廣漠たる肥沃の野と化し、また高原と化し、やがて巴東山地に接せんとして、あまたの丘陵をなしてゐる中の一座で、山脚から五百尺もあらう。覆船山の名もあるやうに、船底を倒さにした美しい姿の山で、樹木と溪水とに恵まれてゐる。揚子江岸の上流宜昌からするも、下流の沙市から舟と轎とを併せ用ふるも、共に二日程の地で、明末の殺人鬼張獻忠が亂に、残る方なく荒らされたさうだが『智者道場』の額を掲げた大雄殿の外に毘盧殿、天王殿、藏經間などの棟宇建ち並びて、隋、唐、宋の遺物遺蹟がなほ存せられてゐ、參詣者も踵を絶たない。山全體が關羽管領の地域内にあつたこととあり、その神靈がこの山のこの寺に示顯したと傳ふるのであるから、關帝廟は必

ずしも有るを要せぬわけであるが、廓外に接してやはり小關廟がある。年代は新しいが、これもまた相當な廟宇で、進香者が絶えない。

わが國には、支那の歸化僧の關帝畫像を齎らし來て、武侯祠を設けたものの外に、足利尊氏夢に關公に見え、その像を元朝にもとめて、洛東の大興寺に崇祀したのが、關帝を祀れる初めなりと「青栗園隨筆」に見えてゐる。近代では水戸光圀が大の關羽崇拜者で、その後裔なりと傳ふる明末の亡命客心越禪師をまで優遇したことは、「十三朝紀聞」などに散見する。日本人の彼に對する深い敬意と、支那人一般のそれとは、大いに趣を異にするが、實に偉大なる神徳ではある。

呂洞賓 — 純陽子

呂洞賓は、仙人中の代表的な一人である。支那の元旦の第一の儀式である拜天地の桌上的供へ物にも、呂洞賓を中心として、八仙と稱する漢鍾離、張果老、韓湘子、李鐵拐、曹國舅、藍采和、何仙姑の七仙と共に、通草の心、もしくは紙製の小さな彼の像を裝飾用の供花（供佛花とも）として挿す。客堂にかける畫像にも、八仙もしくは五天人を以てする。五天人とは、天官賜福、招財童子、利事仙官、喜報三元、福壽を擬人化したのである。七仙も皆な若干の人間としての事蹟を有するが、呂洞賓も極めて濛朧たるものながら、その事蹟らしいものが傳へられてゐる。

俗に三百六十行と稱する各種各様の手藝人は、みな稼業の神たる祖師をもたぬはない。たとへば、醫師と藥種商とは炎帝神農氏を、裁縫師は黃帝軒轅氏を、大工、石工、煉瓦工は魯班（又は般、すなはち公輸子）を祖師とするやうに、必ずその家業の神をもつてゐるが、呂洞賓は、祖師としてはどうした因縁からか、墨製造人等の外に、巫、醫、卜、相などを業とする者からも祀られてゐる。呂祖と稱するのが即ち彼である。

民國五年のころから、山東省の濟南治下の濱縣の片田舎に起り、次第に全國的に廣がり行き、海外にまで手を伸ばし、わが國では人類愛善會といつてゐた紅卍字會においては、呂洞賓を以て、孔子、釋迦、老子、マホメツト、クリストの五大教祖の共同代宣者と見てゐる。民國十二年十一月九日附の五大聖人共同諭言なるものは、實に彼の代宣にかかると紅卍字會中の人はいつてゐる。彼と宋の濟顛和尚といふのが、最もたびたびこの會の乩示に現はるる神靈であるともいふ。佛

領印度支那の新宗教高臺教カオタイにおける李太白と好一對といふべきだ。他の一人の濟顛といふは、名を道濟といひ、天台の人、李氏の子、靈隱寺で剃度し、酒肉を狂嗜したので、濟顛と稱して氣違ひ扱ひにせられた。淨慈寺といふに居た時、火が發して寺を焼いたので、彼は嚴陵ギヤウレイに行化し、袈裟をうち被せ諸山をつつむと、その山の木が盡く根こぎにされて、おのづと河に流れ出た。彼は蓋し六甲神の化身であつたと、「大清一統志」に見える異僧である。けれども、支那民衆の呂洞賓崇拜は決して紅卍字會に始つたのではない。

呂洞賓の傳記と見るべきものは、道藏中にも、金蓮正宗紀、金蓮正宗仙源像傳、三洞群仙錄などの六種がある。この外にも列仙全傳などにも見えてゐる。ただ、それ等の書の常として道教的神祕に充ち滿ちたもので、現代人の眼からすれば、不自然極る一創作としか見えないが、しかも、彼の著作と見られてゐるものが、道藏に收められてゐるものだけでも二十二に上るとあるところからすれば、彼も

亦た一箇の儼たる思想家であり、人格と筆舌と才識とを兼ね備へた人物でもあつたのであらう。通説によれば、今の陝西の蒲坂の永樂鎮の人、諱は崑ガン(巖とも)、號は純陽子、洞賓はその字である。回道人も、回先生とも稱せられるのは、呂の字を二つに拆わかちていふのである。祖父の渭は禮部侍郎、父の讓は海州の刺史であつた。唐の貞元十四年四月十四日に生れたので、純陽子と號した。形貌世の常ならず、資性敏悟で、彼を見るものは、神仙になるのはこんな人だらうと噂した。しかも、會昌年間に二度まで試に應じたが、遂に及第しなかつたので、儒に志すことを己め、廬山の火龍真人に従ひ、天遁劔法と龍虎金丹の祕文を授けられこれより道を學ぶことに意を潜めた。次で長安の酒肆において、漢の仙人鍾離權カウライ(即ち八仙中の漢鍾離。漢は漢代の漢、鍾離は複姓)に會ひ、彼から十度の試練をうけた後、金丹大道を授けられて、彼の道は成就したのである。その後、彼は湘鄂、江淮カウワイの各地に、四百年が間にしばしば姿を現はし、靈劔を試みて蛟害を除い

たりなどもし、洞庭湖に臨む岳陽樓に群仙と相會し、酒を飲んで詩を壁上に題したりなどもしたといふ。又、「列仙全傳」によると、宋の政和年間、宮中に『崇』あり、白晝に形を見はし、金寶や妃嬪を盗む。上、精齋虔禱す。上、一日、晝寢ぬ、夢に一道士を見る。碧蓮の冠をいただき、紫の鶴氅をつけ、手に水晶の如意をもつてゐた。上に揖して曰く、上帝の命をうけて來り『崇』を治するなりと。即ち一金甲の丈夫を召す。丈夫、立ろに『崇』を捉へて啗ひ盡す。上、丈夫は何人なりやと問ふ。道士曰く、陛下が崇寧眞君に封じたまへる蜀の關羽なりと。上、道士の姓を問ふ。道士曰く、臣が姓は陽、四月十四日に生ると。上、夢覺めてその洞賓たるを知る。遂に天下に詔りして、洞賓香火の處に、皆な正妙通眞人の號あらしむと。これに従へば、彼に對する支那民衆の崇拜は、宋代に始つたものやうであるが、元の世祖から純陽演正警化眞君、武宗から純陽演正警化孚佑帝君の號を追諡されてゐるところを見ると、元代において彼に對する崇拜の最高潮に

達したことが想はれる。かの通俗道教の經典の一とも見える功過格は、地藏王功過格、袁了凡功過格、各種の功過格を纂集したものなど數種以上で、いづれも世に行はれてゐるが、この中の『太微仙君純陽呂祖師功過格』といふは、同じ功過格の中でも、最も重きをおかれてゐるもので名を呂洞賓に藉つたものである。彼の通俗道教において占めてゐる位置を知るに足らう。又、彼に名を藉るもので、最も民衆生活と親密なのは、呂祖靈籤と稱するみくじである。各處の呂祖廟においてはおもとより、綜合道觀内に分祀した呂祖殿などにも、必ずこのみくじの筒が備へてある。心に患ひあるものよりは、身に疾ひあるものが、彼に祈念して彼の靈籤を求める。みくじの中には、その病に適應する藥草などの名を擧げて、一種の處方箋たる實を備へてゐる。遺跡と稱するものの外に、彼の筆蹟と稱せられるものもある。山海關に近い醫巫閭山の太微觀音閣の後方の峭壁に刻書されてゐる『蓬萊仙境』の四字がそれで、傳ふるところによると、彼はこの山に修養してゐた

こどもあるといふ。醫巫閭山の名が聞へたのは、隋の開皇年代に溯り得るとして
も、北邊における道教の寺廟として、その儼たる存在が認められ出したのは、山
麓の北鎮廟にある元碑によつても、元代以前のことでない。遼、金の古蹟もあ
るが、それは道教の靈山としてのものではない。従つて、呂純陽が道教において
現在の位置におかれるに至つたのは、すべて元代にあると考へてよいのであら
う。彼は元代において、大いに朝廷の崇敬を得る一方、同時代に特殊の發展を遂
げた雜劇ざうげきにより、戯劇化し、神仙化し、無知大衆の信仰對象たらしむることに、
最大の力を與へられたのである。すなはち元の雜劇中には、その代表作ともいふ
べきものに、馬致遠の黃梁夢（漢鍾離度脫唐呂公也、邯鄲道省悟黃梁夢也）
があり、又、呂洞賓三醉岳陽樓（郭上竈雙赴靈殿也）がある。又、元以後にお
いては、明に湯臨川の玉茗堂ぎよくめいどう四種の中に邯鄲夢記かんたんむきがある。その他、歌詞、俗謡に
呂純陽を出頭せしめてゐるものは、元以後、數限りもない。

呂 尙 — 太公望

「史記」に齊太公世家の章がある。姓を記さず、名を指さず、ただ太公とだけ
で、姜太公、太公望の意だと肯かれるほどに、支那民衆の腦裏深く且つ遍く知ら
れてゐる呂尙の最も正傳に近いものである。その世系をいへば、四嶽の裔で、虞
夏の際に、呂に、或は申に封せられて、姜を姓としたこともある。それから幾時
代かを経て呂尙、字は子牙となつた。彼は窮困して年老いたが、直ぐなる釣針を
以て人間の周の西伯をつり上げた。西伯、獵に出でんとし、これをトして曰く、
獲るところ龍に非ず、鷹みづちに非ず、虎に非ず、熊に非ず、獲るところ霸王の輔たすけなり
と。西伯、果して渭の陽の岩に踞して綸いさを垂れてゐる太公に遇ひ、ともに大いに

語りて曰く、わが先君太公、聖人の周に適くものあるべし、周以て興らんと曰へりき。子は眞に是れか。わが太公、子を望みて久しかりきと。故に彼を尊んで太公望と曰ひ、載せてともに歸り、立てて師となすといふのである。西曆紀元に前だつこと八百年の事蹟だから、正確に近いものといつても、それは程度の問題である。ところで、史記以外の「尙書大傳」といひ、「六韜」といひ、姜太公に關するかぎり、その記載するところは、童話よりもたわいの多いが多い。しかし、彼と同時代の人で、紂王の忠臣であつた比干。彼の好敵手で遂に彼のために破れたといふ趙公明、——一説に、五路財神の主神たる金龍如意正一龍虎玄壇真君は彼なりともいふ——に對する支那大衆の崇拜と、それから生れた種々なる傳説と習俗とは、太公を中心として考へねば解決がつかない。雲宵、瓊宵、碧宵の三女仙についても同じである。

比干の文財神たるに對をなしてゐる武財神の關羽も、大衆の間に人氣があり、

その祭祠の香火の盛んなること、他の史上の人物に類を見ない。彼と同時代の蜀漢の丞相諸葛孔明に對する民間の敬意も、はるかに前漢の伏波將軍馬援に過ぎ、劇に仕組まれ、今は映畫ともなつてゐるが、最も廣く傳説化せられ、魔除けまじないの類にまで、その神威が使はれてゐるといふ點では、比干も、關羽も、はた諸葛孔明も、この姜太公には遠く及ばない。彼がかやうな傳説上の位置を占むるまでには、「封神演義」といふ如き、代表的な大衆向の神怪小説の影響もあり、この大衆小説に題材を藉りた戲劇なども、また大いに與つて力あることではあるが、しかも、主なる理由としては、呂尙その人の身世が、極めて神異なる上に彼に打倒された殷紂王と姐己とが、また淫虐のかぎりをつくした人間たちであることと、後世、彼の奇怪な身世を、いやが上に超人的に、神話的に助長せしめた道書の類の多いことを擧げねばなるまい。さらに、これを推しつめていふと、姜太公は、最も支那式な道教によつて説かれるために、最も適はしい資格と條件

とを有する人物であるからだらう。

中南支那では、『太公在此』の四字を書して門戸に貼り、桃符、鍾鬼、張天師の護符などと同じやうな安人利物、鎮宅驅邪の意味で用ゐ、さらに、醬油を用ゐた煮しめの魚肉などの防腐に效ありとして、赤布に太公の名を書して、厨房の小型器具に結びつけておく習俗がある。ある人「食譜」の著者で、一代の文人たりし袁隨園に向つて、姜太公と醬油の煮しめとの關係如何と問ふと、隨園は、ぬからぬ顔で、されば、太公は善く兵に將たらず而して將に將たりし故ならんと答へたとある。將は醬に、又、姜にも通ずる。それに醬は百味の將帥なりとの語もある。蓋しそのしやれである。

北支那から張家口あたりの蒙疆にかけては、民家新築の牆角に、嫁取りの際には門口に『太公在此』と朱書した木板を掲げる習俗がある。中には對聯風に『諸神退位』の四字を添へたのもある。そして、これに關して四種の傳説が行はれると

て、中國民俗學會の雜誌「孟姜女」に、張家口の通信が載つてゐた。その中の三傳説は、いづれも「封神演義」に基いたものらしく、その代表説を擧げると、

封神完く畢る。玉皇は大いに歡ばれて、太公にもその勞に酬ふるために神號を與へられやうとすると、すでに神位は満ちてゐて、與ふべき缺位がなかつた。太公は已むを得ず、恩を謝して去り、牆角に坐した。牆角に太公在此とかくのは、かかるいはれからである。

第二説は、それと異つてゐる。ある時、天地（神の意）が、人間どもが次第に心驕り神を蔑ろにするのに腹を立てられ、惡風惡雨を降して、彼等を重罰せんとした。正に危急なる時、たまたま太公が來合はして、牆角に坐した。そこで風雨はばつたり止んで、人間どもは幸に危難を免れた。それから後、吉に趨り凶を避ける意で、太公在此と書く習はしとなつた。

後説は何に基くのか知らないが「太平廣記」に引いてある「博物志」に、次の

やうな太公の神異説を記載してゐる。もしこれと同根に出づるとすれば、張家口あたりに傳はるものは、道教臭きことは一であるが、「封神演義」などよりはすつと古るさうだ。その大略に曰く。

彼が文王に用ゐられて灌壇令たりし後、一年もの間、風が吹いて樹の枝を鳴らすやうなことをすらなかつた。文王、ある夜の夢に、麗はしい一婦人が道に當つて哭いてゐるのを見た。その女がいふには、わたしは東海の泰山神の娘で、西海に嫁してゐるものです。東に歸りたいと願つてゐるのですが、灌壇令が道をふさいでゐ、且つ太公が、徳を備へてゐるので、わたしは暴風疾雨を以て過ぎて行くことができませぬと。文王覺めて後、太公にかくと告げた。と、果せるかな。三日三晩、西の方から疾雨驟雨がつづいた。そこで、文王は太公を拜して大司馬とした。

碧霞元君 — 娘 娘

娘ニアン、娘ニアン、奶奶ナイナイ、娘奶奶ニアンナイなどの敬稱を以てせられる女性の神は、一にして足らぬ。

これに姑クウ、媽マイなどの敬語を附したものを加ふれば、南北を合して、あるひは千百を以て計カゼふるだらうが、ここには娘娘の代表的なる碧霞元君を主として説く。

娘は少女の稱である。又、父を爺といふ時には、娘は母の意である。この時は爺を耶に、娘を嬢に作ることもある。娘子といへば、少女のことであることもあれば、夫が妻をよぶ際の稱呼たることもある。古は父の阿耶に對して、母を娘子としたのであるが、明代あたりには、この對稱、めちやくちやとなつて、庶人の妻から大官の國夫人にいたるまで皆な娘子といつたと「輟耕錄」にいつてゐる。

ただ、娘娘すなはち嬢嬢にいたつては昔から母后の稱である。後世、皇后を稱して娘娘といふは天下の母たる義である。すなはち娘娘と天后の后とは異字同義で帝王の配偶——妻としての女人の最上級にあるものと稱せられる。奶、古字孌は婦人の通稱。宋代まで文人は婦女を稱してかくよんだが、そのころにも、僕婢は主婦に對してかうもよんでゐる。が、娘娘と后に比すれば、ずつと格式は下つてゐると解するのが通念である。

南方の沿海地方における天后聖母と相埒あひあたるもの、すなはち、ここにいはんとする娘娘——天仙聖母である。言ひ換ふれば、天后は海にゆかりの女性の神であり、娘娘は陸上の女神である。北支那から滿洲、蒙古縁邊にかけての娘娘に對する民衆の信仰は、決して天后にゆづるところはない。男性の、武神の、また財神でもある關帝ほどに南北を通じての信仰は見られないけれども、さりとて多く相遜あひゆづらない。大石橋迷鎮山に鎮坐するものを初めとして、滿洲國內にある娘娘廟の數、

約二百七八十といふから、大したものである、北京だけでも、北京および北京近郊の妙峯寺、碧雲寺、西頂、萬壽寺等の「燕京歲時記」「帝京歲時紀勝」に擧げられてゐるものだけを計かぞへても十餘ヶ所に達する。これに山東の泰山の碧霞元君廟を首はじめとして、北支那一圓に坐落する大小の娘娘廟を計上したら蓋し千以上にもならう。幼稚極る木版の娘娘畫像にいたりては、北支那の民家にしてこれを祀らない家の方が少い。

碧霞元君すなはち娘娘の主神と認められてゐる女神の本體については、一致した定説がない。廣東の中山大學の「民俗」の『妙峰山進香調査專號』における羅香林、周振鵬、顧頡剛等の新進學者の研究は、最も新しく且つ科學的なるものである。それによれば、

第一説は、東嶽大帝の女の玉女であるとの説。いつの世にか、人民によつて刻せられた彼女の石像が泰山の頂の玉女池畔にあつたのを、宋代に東嶽を封する際

天仙玉女に封じたのだといふ。山東通志も、大體、この説を取つてゐる。すなはち、宋代といふのは、眞宗の時で、玉女像の池中に淪しつんでゐたのを、勅命を被つた王欽若なるものが浚へてこれを得たが、甚だしく破損してゐたので、玉を以て易へ、龕かんに納めて舊所におき、昭亭觀を建てたといふのである。

第二は黄帝の七女の一人なりとの説。黄帝、岱嶽觀を建てて七女の中の雲冠羽衣を遣はして西崑せいこんしんじん真人を迎へしめた。玉女はその一人で、後ち道を修めて神となつたのであるといふ。

第三は華山の玉女説。玉女といふは普通名詞で、特定の人を指したのではない金童に對する稱である。元君は即ち華山の玉女なりといふ説。

第四は民間の凡女の仙化説。漢の明帝の時、西中國・孫寧府・奉符縣の石守道の妻の金氏なるものが、中元七年四月十八日に一女を生んで玉葉と名づけた。容貌端正で性質は穎敏えいびん、三歳で人倫を解し、七歳で法を聽き、曾て西王母に禮した。

十四歳、王母の教に感ずるところがあつて、天花山黄花洞に入つた。三年の丹精によつて仙的效果を得たといふのである。(一説には、石守道の女むすめでなくして妻)天空山といふは即ち泰山で、今も玉葉が修真した石室といふのが、山の東數里のところにあると傳へ、古くから親しく探查した遊記の類もある。

以上の四説、いづれを眞とも定めがたい。が、第一説は、道教信者の宋の眞宗が、北方の敵に對する失敗購過と、國內における太平粉飾とから、泰山封禪の芝居を演じ、泰山の主神の外に俗受けのよい女神を持出し、五千尺の山頂に素晴らしい宮閣を作らしめ、民衆の信仰を煽かほる基を開いたのだと見るものもある。しかし、眞宗とその佞臣王欽若とが玉女石像發見の手品を演じたといふことは、その以前から、泰山附近に玉女の神話があり、その神話は、巫道みちだうや、一般地方人の間に、相當に、深く且つ廣く信せられてゐたことを證據立てるものと考へられる。

第四説は、現代識者の間に、最も多くの肯定者を有する説で、民間の聰明な女子

↓能くその聰明もしくは技巧を利用して、民衆の苦難をはらつてやると稱した↓
それが時に合して人の歓迎を受けた↓その女子の肉身が泰山と何かの縁故ができ
た↓最初は婦人の信仰だけであつたが、次第に男子にも及び、最後には君主の封
賜を受くることになつたとの、元君にいたるまでの階梯さへ立案されてゐる。

娘娘廟の主神が、右の天仙聖母碧霞元君なることは、ほぼ一致してゐるところ
であるが、大抵の廟は、碧霞元君を中央にし、その右に眼光娘娘と稱する眼病ば
かりでなく、痘疹、癩疹などの諸病を治する女神と、その左に、子孫娘娘と稱す
る兒を授ける女神で、送子、送生、催生娘娘などの別名を有する一位とを配して
ゐる。そして主神の碧霞元君は、財福娘娘とも、福壽娘娘とも稱せられ、他の二
女神も、上記の外に三、四以上の異稱を有せざるはない。

もつとも、右の三女性神を、殷の紂王の忠臣の趙公明の三妹、すなはち雲霄娘
娘、瓊霄娘娘、碧霄娘娘なりとする俗説も、可なり民衆の間に信せられてゐる。

それによれば、三女は共に才色兼備加ふるに武藝と道術とに秀いでてゐた。戰場
に出づるごとに敵に勝つた。そして、死後、戦功によつて贈諡され、祭廟も設けら
れた。しかるに、この三女に、無論、初めはさうではなかつたのだが、年代を重
ぬる間に、いつか佛教の觀世音菩薩の半面が附せられ、今日のやうな慈悲の女神
化せられたのだと。この説も、わが國の一部支那通間にとられてゐるやうである
が、例の封神演義によると、姉妹の三娘娘は、趙公明を兄とは稱してゐるが、こ
れは道兄の意で、彼が姜子牙のために敗死せる以前、すでに三仙島に住める道姑
として、神仙としては彼以上の位置を占めてゐ、彼の死後は三姉妹相率ゐて出陣
し瓊霄は混元金斗といふ神妙不可思議の靈器を用ゐて、子牙に與みせる赤精子、
廣成子等をもまかした後に擒にし、終に元始天尊と玄都大法師すなはち老子の出
駕を請はせたほどに、手強い戦陣の女將たる道術を示した後、黄河陣に歿落した
ことになつてゐる。封神演義はもとより荒唐無稽を極めた通俗小説だが、その影

響するは、前にもいへるように壓倒的である。決して軽く視るべきでない。詳しくは演義の第四十七回から五十回までを讀むがよい。彼女等はおそらく趙公明の女むすめでも妹でもない。

娘娘の職能を、科學的に分類した現代學者もある。ここには省略する。が、つまるところは、原始的な母性崇拜を道教化して、この三女神に藉りたものと見るのが、一番當つてゐるやうである。授兒娘娘の横抱きにした人形の股の間の一部を爪でけづり、その粉を呑みこめば、受胎の、或は、その型けいそざう塑像前にならべてある泥人形をもらひうけて歸れば、生育の慶びあり、等等、の迷信にいたりては數かぎりない。

唐たう明めい皇くわう — 老郎神

支那の梨園の子弟等が、祖神とも、守護神ともして尊祀するのは、唐明皇といふのが通説である。明皇は即ち唐の玄宗、彼の諡おくりなを至道大聖大明皇帝といふからである。

曾て北京の一戲園の樂屋裏に、粗末ながら特に一隅を劃して神龕しんかんをしつらへ、白面、無髯、豊頬の人の、玄冠に似たるを戴き、龍袍らしきをつけた木彫の像が納めてあつた。そして、その前を過ぎて舞臺に出入する戲子等やくしやが、急ぎ足なる時にも、必ず一禮を施してゐるのを見て、神主はと問へば、言下に唐明皇なりと彼等は答へた。

蘇州には老郎廟といふのがある。前清時代は、樂籍に隸するものは、必ずこの神廟に名を署する諺で、廟のことを俗に梨園總局とも呼び、中元前後の一日を擇んで、青龍戲と稱する祀神の戲を奉納する例であつた。又、戲班の人たちは、舊曆六月二十四日の雷尊誕の日、城内の圓妙觀へ、老郎神の神輿をかつぎ、鹵簿儀仗みな他人の手をからず、彼等自らこれにあたり、神妙に行事の一を勤めたものである。劉澄齋の老郎廟の詩の句に、『梨園の十部笙簧を調ふ。路人走りて看る老郎に賽するを。老郎の神は是れ何れの許ぞや。乃ち云ふ李氏六葉の天子唐明皇と』とあるは是れである。

老郎については、古來、異説もある。神話の帝王顛頊の子の老童を誤りて老郎となせるもので、老童は音聲の祖であるからといふものもある。南京の遊里の秦淮の妓女どもが、老郎會(或は老臉會とも)なる紋日に祭る神は、女閩の創始者といはれる齊の管仲ともいつてゐる。けれども、優伶鼓樂の祖神としては、唐明皇

ほどに適はしきはなからう。「滿洲禮俗調査彙編」の工匠藝人奉祀の神像の項に、唐明皇、戲園鼓供する所の神なりとあるのは、蓋し通説に従へるものである。

浙江の東海岸に沿うて、墮民だみんとよばれる特殊民族が住み、紹興、餘姚、蕭山、嵊、定海、奉化などへ廣く分布してゐる。彼等の男女の職業とするところは、普通漢人の下賤視する事ばかりで、中にも婚喪祭祀の際の唱戲樂手は、また彼等に限つた職業である。かの紹興班の劇員の如きは、まづ例外なくこの墮民で、紹興府下に住むものは、平日から演戲を學習してゐる。彼等の習俗は、一般人とまづ大體は同じであるが、ただ一つ、特異なのは、信仰の對象として俗に老郎菩薩と稱するものを、各戸に奉祀してゐ、他の神佛に對しては、この老郎菩薩に拂ふだけの敬意をもたないことである。菩薩像は、一見、一尺ほどの木偶の衣冠束帯した座像で、古拙といふよりは極めて粗笨な彫刻だから、正確に解説することはできかねる。彼等は戲を演ずる時、必ずこれを後臺に祀る。そして老郎菩薩の本體は

唐明皇である。明皇は梨園の創始者で、われ等の祖神なるが故にといつてゐる。又、この老郎菩薩像は、送子菩薩とも考へられてゐるやうで、結婚の翌日、新婦の附添の喜娘（これも墮民の婦女の專業のやうになつてゐる）がこれを奉じて洞房に入り、新婚者の床上に安置し、うやうやしく香燭を焚き、一種の樂を奏して祝福する例である。その故を問へば、螽斯の慶び、すなはち妬忌せずして子孫を多からしむるために祈念するのだと答へる。墮民の種族は、ともあれ、これも唐明皇を老郎神とする一實例とはならう。

羯鼓錄に出でたりとて、太平廣記に引用されたものに『唐玄宗は音律に洞曉した。蓋し天才に由る。あらゆる管絃、その妙を極めぬのはなかつた。調曲の製作の如きは、意に随つてこれを成し、章度を立つるでもないのに、長短適度であつた。尤も羯鼓を愛して、常に鼓は八音の領袖であると稱してゐられた。二月の初のある朝、巾櫛を畢られると、夜來の雨晴れて、得もいはれぬ明麗な景色だつた。

と、玄宗は、この景物をただに見過してならうかと、左右を顧みて酒を命せられた。高力士が羯鼓をとつて玄宗自製の「春光好」の一曲を撃つと、玄宗はいかにも神思自得の體であつたが、やがて殿前の柳杏に目をやられると、さきほどまでは含んでゐたばかりの柳杏が、いつのまにか皆な發拆してゐた。玄宗は、それを指して笑ひながら、我を天公と喚ばずして可ならんやと、側近に侍つてゐた嬪嬙内官たちにははれたので、臣下一齊に萬歳と呼んだ。玄宗には又「秋風高」といふ曲の自作もあつた。いつも秋空が晴れ渡つて一點の雲翳もない時、これを奏すると、風おもむろに起つて、庭前の木の葉が落つるのであつた。入神の妙、かくの如し』とある。

玄宗は、その晩年、楊貴妃の色に溺れて、朝政に倦み、奸佞を近づけて、天下の大亂を招きはしたが、政治、軍事以外、文化方面における功勞者として、支那史上、彼ほどの人はない。南北朝以來、やうやく盛んになつてゐた胡樂は、彼の

時代に漢人固有の俗樂と新たに融洽して、新俗樂を生んだ。儒教的な雅樂は名ばかりの存在ではあつたが、玄宗はそれをも中興した。漢の清商三調の流れをも汲む清樂は、やうやく廢れんとして二十六曲だけ残つてゐたのを、玄宗は、これに法曲の名を與へ、新曲を製して更生せしめた。梨園を設けて新たに音樂を教習せしめたばかりでなく、隋以前の百戲すなはち散樂をも流行せしめた。太常寺内に太樂署と鼓吹署とを設けて協律郎の外に、令、丞、樂正、府、史などの官をおいて音樂を司らしめた。後には、さらに外教坊をおいた。玄宗の時には、太常樂工、教坊と梨園との樂工、妓女、宮女を合して一萬餘人に達したといふ。樂器の進歩も、また前代未聞であつた。箏、豎箏篋、琵琶、五絃、橫笛、笙、箛、篳篥、羯鼓、鷄婁鼓、答臘鼓、腰鼓、銅鈸、貝の十四器は十部伎の樂器の代表的なるもので、その中の、箏と笙との外は皆な胡樂器であつた。玄宗は、この意味では、西域文化の攝收者とも、將た東西文化の融洽者ともいへる。わが「續古事談」の著

者が、唐の玄宗皇帝は近代の明王なり、そのしるしには——と冒頭して、その事例を擧げた見識は、まことに見上げたものである。支那に生れて戲樂を業とするものが、彼を尊んで祖神となすのも蓋し當然のことだ。

北京の梨園公會が、陰曆の九月九日、九皇會と名づけ、祭壇を設けて祀るのは確めたことでないから斷言は避けたいが、多分、斗姥であるだらう。北京の劇通といはれた辻聽花氏の遺著にも、この日は、戲子の祭日の中からも、休日の中からも除外されてゐるが、しかし、周瘦鵬なる一種の隨筆家の「三十年間の上海見聞録」に、上海の各梨園は、九月一日から九日までの九日間、壇を設けて齋戒し斗姥に供奉する。門首には燈をかがげ、皂色の玄武大星の尖角旗を挿し、役者の家の女子供まで、皆な精進料理を食ひ、誠敬の意を表する。これを九皇會と名づける。上海の妓家の六月における雷齋(前にいへる雷尊祭のこと)と、これとは極めて似たものである。古人が神道を設けた意は、もともとこの娼優の輩をしてい



→ 武財神關羽畫像
↑ 文武財神像—關羽と比干

ささかなりとも儆戒けいかいを知らしめんとするに過ぎなかつたことが、これによつても知られるとある。江南の陰曆六月六日は道教の清暑日にあたり、清暑齋を修むべき日でもあるから、道士輩が名を天神觸犯に藉りて齋戒を説き、素食をすすめ、一方、閑散の時季にある優伶等が、この時にあたつて老郎神像を昇いで寺觀に打だ醮せう（禳祓じやうはつのこと）を監するものも、あるひは周瘦鷗しうせうけんのいふところの如くであるかも知れない。

← 唐明皇—映畫「樓東怨」に上映されたる、妃は梅妃



← 文昌帝君像—「陰陽文廣義」に挿まれたる



十七世為士大夫身

文昌帝君 — 梓潼帝君

民國となる以前までは、府學、縣學の建物の一部として、文昌帝を祀らざるところはなく、省城、縣城から名もない郷村にいたるまで、專祀と配祀との差はあつても、また彼を祀らざる地はなかつた。南支那における郷村生活の著者D・H・カルプは、人口僅かに六百五十人ほどの福建省の僻村の、二十呎に三十呎の村廟において、九體の神佛像中の一體は、古代羅馬のミネルヴァとミユウズに相當する文神すなはち文昌帝君であるとして、帝君についてはエンサイクロペディア・シニカに見えるクーリングの解説を引用してゐる。科學が廢れてから四十年を経てゐる、官祭も行はれなくなつてゐる今日ではあるが、支那に舊文學あり、自然崇拜

が已まず、通俗道教が行はれ、それによる善行が跡を絶たない間は、文昌帝君を祀るもの、信仰する者は絶無たる日がないのであらう。

清朝在りし日の北京では、陰曆二月三日の神誕當日、特に大臣を地安門大街の文昌廟に差遣してこれを祀つた。蘇州あたりでも、知府、知縣、學官等、竹堂寺の文昌祠において官祭を行ひ、その餘の道宮法院などの帝君像を供奉するところでも、また齊しく崇醮しゅうせうを修むる例であつた。いづこの文昌祠も、今は當時ほどの盛典を擧ぐるはないが、しかも、北京においては、文昌祠の外に、精忠廟、金陵庄、梨園館など、依然として惜字會、文昌會を催し、中には演戲を獻するものもある。蘇州あたりでも亦た同様で、貧富分に應じて燒香の資を奉納し、文昌會とて殿庭に紛集する。

文昌祠は、又、一に梓潼帝君廟しんどうていくんとも稱する。俗姓は張、名は惡子とて、四川省梓潼縣の七曲山に居つた。晉に仕へて戰に歿したのを、後人が廟を立てて祀つた

ともいひ、秦の惠王の時の人、姓張、名亞、その先は越嶲えつすゐの人である、彼は道術で著あはれてゐたが、母の仇を報じたことにより、劍州の七曲山に徙つた、後、晉に仕へて戰死したのであるともいふ。人間としての帝君の實蹟は、諸書に見えるところ、僅かに是れだけのことであるが、その死後の靈異談は信せられぬほどに多い。唐の玄宗は、蜀に幸した際、神靈を成都の萬里橋に迎へ、追封して左丞相とし、僖宗きそうは同じく利川の桔栢津きつはくしんに神に見えたりとて、濟順王に封じ、又、親らその廟に幸して劍を奉納したりしてゐ、宋の眞宗また英顯王に封じ、祠宇を修めさしたりしてゐる。元にいたつては、この神を尊崇すること前各代に過ぎ、仁宗は進めて帝君とし、特に天下に令して學校ごとに祠を設けしめた。その加封を、補元開化文昌司祿宏仁帝君と稱したのを見ると、元宗は道士の輩わがらが、文昌神なるものを創造して、これを人間の梓潼なる張惡子に當てはめ、梓潼神は文昌府事および人間祿籍を掌るといへるを信じてのことであらう。「清嘉錄」に引用してあ

る諸書を見ると、李義山の詩などにも、張惡子廟とはあるが、文昌などの稱はなく、又、人間祿籍を司るともいつたのではない。これによると、道士の附會説が唐以後に創はじまれるは論無く、假りに元代とするも、元初ではなかつたのであらう。文昌宮は、天官書にいふところの斗魁とくわい、戴匡六星たいきやうで、その中の司命と司中との二星が、古へ文昌を祀るものの対象であつたが、今は第四星の司祿だけが、かへつて帝君を稱する文昌宮となつたのだといふ。これについては、學者間に多少の異説も行はれてはゐるが、文昌が紫微、太微とともに天の三宮なることは動かない。明の宏治年間には、前朝の制を廢して、文昌祠の學校に設けられてゐるのを毀ち、廟祀を罷やむべしとの議もあつたが、遂に確實に行はれるに至らず、景泰五年には、かへつて梓潼に文昌宮を建てたりなぞして、後年見る如き始末となつたのである。

文昌帝君を文神とし、科擧に志す青年學徒の守護神たらしめたのは、道士輩と

元朝との業であるとしても、一般民衆の信仰を今日ほどにした他の一理由は、彼の名に假託した「陰隲文」の擴播によることに疑ひはない。文昌大洞經、文昌孝經など、他にも文昌の名を藉れるものがあるとは聞くが、見たことがない。ただ陰隲文五百四十四字にいたりては、誰が手に成れるにしろ、確かに名文であり、善書の一となすに適はしい。文の冒頭に『吾一十七世爲士大夫身』となるとあるのを、轉々して化生したことに解して、陰隲文廣義などいふ註釋の諸書、周の初めに張善勳といふ人間に生れて以來、西晉の張惡子となるまで、醫者に、仙人に、王者に轉生せしめ、中には金色の蛇にまで生れかはらせたのがあるのは、通俗道教全體が、知性によつて判斷すべき宗教ではないにしても、あまりに現代ばなれをしてゐる。しかし陰隲文の全部がさうでもない。急を濟ふは涸轍の魚を濟ふが如くし、危を救ふは密羅の雀を救ふが如くせよ。孤を矜あはみ寡を恤あはれ。老を敬ひ貧を憫れめ。衣食を措きて道路の饑寒に周まなへ、棺槨を施して屍骸の暴露を免れしめ

よ。又曰く、道を礙ぐる荆榛を剪り、塗に當るの瓦石を除け。數百年崎嶇の路を修め、千萬人往來の橋を造れ。訓を垂れて以て人の非を格し、貲を捐てて以て人の美を成せ、等、等、これを轉用して現代文明國の社會事業の精神とするも、敢へて不可はなからう。

七曲山にある本山格の文昌宮は、蜀の棧道のほぼ中間にある。梓潼へ南十支里ばかりの亭路に『送險亭』と題した石表がある。北から南へするものは、險初めて盡きて夷に入るのであるが、南から北に行くものにとりては、このあたりから險路に入る。石表から北へ十支里で七曲山下に達する。一座の觀音廟があつて、廟西の石壁の下に清泉が湧き出てゐる。それに因んで水觀音の名がある。泉は即ち古への劍泉である。そこから千佛崖とて、石壁にあまたの佛像を鑄てるところを過ぎ、山頂の文昌宮に達する。本廟の外に、桂香殿、啓元殿、天尊殿などの配享の堂宇がある。昔、蜀の二舉人あり。劍門の張惡子廟に至る。夜、おのおの

告げによりて來歳の狀元賦を作ると夢む。甚だ靈異なり、と巖下放言などに見えたのは、即ちこの廟である。南北いづこよりするも、棧道を経るものは、七曲山下を過ぎざるを得ぬのであるから、かの靈異に感じ入れる二舉人も、この廟に宿つたのであらう。それにしても、山下の觀音廟、中途の千佛崖など、文昌帝君の本廟としては、あまりに佛教臭が甚だしいやうな氣もする。

竈神

わが京都の平野神社は、八姓の神の合祀といはれて、源平藤橘いづれの姓氏の人であれ、みなここに詣でねばならぬ仕組みとなつてゐるさうであるが、伴信友の研究によれば、古へは今木神、久度神、古開神、比咩神の四柱だけを合祀してゐ、桓武天皇の平安京を開きたまふにあたり、大和から遷させられた神社である。今木神と申しあげるは、多分、百濟の聖明王にゆかりを有せらるる神。久度神は大和の國の地名に因みを有する神ならんとある。この二柱の神について故内藤湖南博士は新しい一步をふみ出して、今木は新漢—いまきのあや—『新』即ち外來の新種族の神。久度はくど即ち竈かまど、支那の灶神だらうと「京阪文化史論」中に詳

しい攷證かうじょうを試みてゐる。これを定説となし得るや否やは、史家でないものの知る限りでないが、支那の俗信の古く日本に流入して、今は誰ひとり怪しまないまでに日本化したものが、二三にして足らざることは、これを信じて錯あやまりなきどころだらう。大阪の天王寺にも庚申堂がある。文武天皇の大寶元年正月七日の庚申の日、青面金剛天降りて、僧都豪範に靈像をさづけ、その祭祀を命じたまふてより、今にいたるまで一千二百餘年、些の怠慢なく祭りつづけてゐるのだと申し立てゐるが、荒木公廉なる昔のニヒリスチックな狂詩家は、王寺西邊淫祀奇・庚申日子漫禱祠・爲是都人迷祿命・徹宵如歲守三尸と罰あたりな冷笑を浴びせてゐる。庚申信者の眼にふれたら、青筋を立てておこるかも知れないが、庚申祠は支那の俗の千年以前早くもわが國に傳はつてゐる一例。

支那の民間祭祀の中で、竈神の祭ほどに普遍してゐるのではない。上は天子から下はあんべら居住の細民にいたるまで、凡そ煮炊きをする竈を備へたものなら、

この神を祀らざるものとはない。祭の日は舊曆十二月二十三日もしくは二十四日。地方によつて一日の差はあるが、その祭りの日から、南北支那の民衆は、いづれも正月氣分に浸りそめ、正月十九日の燈節を以つて正月を終るのである。

竈神の素性については、異説紛々、いづれを是とすべきか判らない。神の名は禪、字は子郭、黄衣を着、袍髪を披いて竈の中から出てくるともいひ、姓は張、名は單、字は子郭、八月三日の誕生、一家司命の主なりともいひ、竈神は即ち祝融、火の神である。その姓は蘇、名は吉利なりともいひ、また黄帝、竈を作り、死して後、その神となるともいふ。一々列擧するにたえないまでに、いろいろの傳説を有する。

神の素性はわからぬとしても、その職分は極めて明白—少くとも俗信においては明白である。即ちこの神は、一家の吉凶禍福を司る神。また一家の人の善行と悪行とを監視し、十二月二十三日を一年の總決算日とし、その善惡功過を上天し

て玉皇上帝の御前に報告し、もし善が多ければ、次の年は幸福を授け、これに反してもし悪が多ければ災を下す権限を有する神と信せられてゐる。だからいよいよ上天報告の日となれば、竈の上に貼つてある神像に對して祭壇を設け、灶糖と名づける飴をはじめ、菓子、饅頭、餅などを供へ、神の乗用の馬、馬のかいばの枯草、水にいたるまで用意し、なるべく惡に關する報告を少く、善に關する項を多く、上帝に奏上せんことを祈念したてまつるのである。祈念の辭は、地方によつて相違がある。が、いづれにしても、得手勝手を極めたもので『好多説・不好小説』、『辛甘臭辣・竈君莫説』、『遏惡揚善』などに盡きる。また當夜の供へもその中で、最も主要なる灶糖は古書に『その口を黏らしめて説ふなからしむ』とある飴（しろあめ）で、處と家とによつては酒の糟を竈の上になすりつけて、それで竈君を酔はしめんと計るもある。いづれも神をして己れに有利に、而してその使命を牽制せんとする詭計に出づる。

竈祭は、漢代すでに山東あたりに行はれてゐたものらしい。一説には、漢の武帝が祀つて以來、士大夫の家にまで及んだとあり、又、漢の陰子方、臘日、竈を祭り、一心神靈に通じて、神を目のあたりに見、ついに巨富をいたす、それ以來人々みなこれを祭るともあり、又、子方、神を見てより、祭祀には黄犬を犠牲とするといひ、犬といはずして羊といったともある。今も山東では狗肉を黄羊の肉といつて喫つてゐる。が、清朝および清朝以前の朝廷では、事實、黄羊を犠牲としてゐたさうだ。

北京の諺に『男、月に供へず、女、灶を祭らず』といふがあり、蘇州あたりに『十二月十六日、婦女、厠姑そくこを祭り、男子、到るを得ず、二十四日、竈を祭るに婦女めづか預るを得ず』ともあるが、炊事そのものが、中流以下の家では女仕事である以上、かやうな男女の別は事實恪守されてはゐない。そればかりか、南北とも女人が主祭する地方が多い。女ならではの夜の明けぬ國は、けだし日本ばかりでは

ないのだ。が、『竟此日無婦嫗罵聲』と、帝京景物略にある。これは家庭平和を僞装して竈神の報告を有利にせんための一策に出づる。いづれにしる、竈祭の夜だけは、金屬性の叫聲をたしなむやうな殊勝なもの、昔はあつたものらしい。

竈神を夫婦二柱とし、男性を灶君ツアオチユインもしくは灶王爺ツアオワンイエ、女性を灶奶奶ツアオマイタイとし、灶君は善を、灶奶奶は惡を數へるとなし、畫像にも夫婦神の二柱をゑがいてゐる。もつとも、商店、工場などの女氣なき家のためには、男神一體の畫像もある。が灶君に奶奶を配するのは、城隍廟に必ずその夫人の塑像をおくのと一般、神をも人間扱ひとせねば納得しかねる支那人の癖からだらう。

布は袋てい——哄笑佛

上海、漢口とかぎらず、在支西洋人の間に、最も廣く愛玩せられてゐる佛像は布袋である。江西の景德鎮産の眞新らしい彩色された陶製の置物おきものが、陶器店はもとより、西洋人相手の家器店にも、骨董店にも賣られてゐる。まるまると肥胖したのが、あぐらをかいて、その大きな口を開いて無邪氣に笑つてゐ、何ほどの滑稽味さへ帯びてゐるところが、彼等には氣に入ららしい。彼等がこの像に名づけて哄笑佛 Laughing Buddha といふのによつても、その布袋像愛好が、信仰からでもなければ、東洋藝術鑑賞からでもないことがわからう。上海地方で、布袋像を祀れる寺としては、龍華の龍華寺を第一に推さねばならぬ。が、獨りここに

限るのではなく、外國人の見物客の多い上海英租界の靜安寺にも、つきあたりの壁の裏側にも一像が安んぜられて、その臺の下に、英譯を附した賽錢箱がぶら下げられてゐた。布袋は、わが國において、惠美須、大黒、辨財天等とともに、七福神の一として民間の愛敬をうけてゐるが、布袋だけは日本人に愛せられると共に支那、西洋人にも愛せられてゐるのである。

龍華寺——正しくは大興國萬壽龍華講寺といふ。縁起は三國の吳以前に溯るべく、以前でない吳時代の建立なりとしても、支那における最初の佛塔である。日支事變後、この寺がどうなつてゐるかは知らないが、その前には、星宿殿、三聖殿、關帝殿、大悲閣、洗法堂、大雄殿、天王殿、彌勒殿みろくでん、觀音殿、五百羅漢などの大小殿堂の外に、吃齋堂きつさいだう、客室、大厨房などが附屬して、實に宏壯な規模であつた。中央の入口にあたるどころ即ち彌勒殿で、參詣者は、そこで必ず愛嬌たつぷりな彼に逢着した。名代なだいの古塔を除いて、寺は幾度か兵燹へいせんに罹つてゐるから、こ

の彌勒殿も布袋像もおそらく元以前のものではあるまいが、しかも、西洋人のいはゆる哄笑佛像の原型となれるはそれらしい。布袋を彌勒と稱し、この奉祀の殿堂をも彌勒殿と稱するのは布袋和尚示寂の際の偈に、彌勒・眞彌勒、分身千百億、時時示時人、時人自不識といへるに基いて、布袋即ち彌勒、彌勒即ち布袋と信せられてゐるからである。香花の盛んなるもその故で、特種な民間の信仰をあつめてゐるのか、どうかは知らぬが、いつ行つても、像前に南無當來下生彌勒世尊と題した幾旒かの幡はたの下げられてゐるのを見た。かやうな功德禮讚の寄進者も少くないのであらう。「日本七福神傳」に引用せる景德傳統錄や、「佛像圖鑑」によれば、布袋の現身は、今、岳林寺の大殿堂の東堂に現存すとある。今もありや否や、甚だ覺束ない。

布袋和尚が實在の人物たりしことは確かである。傳燈錄に従へば唐の明州の奉化縣の人とあるから、今の浙江の東海岸に生れたのである。氏族は詳かでないが

自分では契けい此と稱してゐた。でぶでぶに太つて、大きな腹を露出して語を出すに定るなく、寢臥處に隨ふ、常に杖を以て一布囊をになひ、凡そ身に供するところの器物は、盡く囊中に貯へてゐた。又、店肆聚落に入つて物を乞ひ得れば、醢けい醢けい魚ぎょ殖しょく、全部を食はずして、幾分か剩してかの囊中に投じた。時の人、長汀子布袋師とよんだ。雪中に臥してゐるのに、雪が身を沾うるはさないもので、大いに奇とされたこともある。人に吉凶を示せば、必ず期に應じて忒あやまつことがなかつた。やがて雨りさうな時には、濡れ草履をはいて急ぎ足であるき、照り上つた日には、高木履を曳きすり橋の上に膝を豎たてて眠るので、人は布袋の行動で天氣模様を豫知した。(中略)梁の貞明三年丙子三月、岳林寺の東廊の下の磐石の上に端坐し、前に擧げた偈げを説いた後、安然として化したといふのである。傳燈錄は前に語を出すに定るなしといへるに拘はらず、しかも、中心記事として、布袋が他の僧との問答の語句を擧げてゐ、また、一戈一盞千家飯、孤身萬里遊、青目觀人少、問路白雲頭

の一偈をも録し、彼の學殖知識の必ずしも凡庸ならざることを證してゐる。

わが國の七福神の一位として、布袋和尚が加へられたのは、いかなる機縁によるのだらう。七福神そのものが、徳川の元祿年代には吉祥天を加へたり、加へなかつたり、享保ごろには、動物狸々を加へてゐるなど、一向にとりどめがなく、神體もまた日本、天竺、琉球、漢土にわたつてゐ、大黒は梵名マハカラといふものもあれば、いや大國おほくにぬしのみこ主命なりといふものがあり、異説紛々である。私には無論わからない。けれども、人の壽命は壽老人に、有福は大黒天に、威光は毘沙門天に、愛敬は辨天に、そして布袋和尚には大量を徵象さしたのだとの説はこぢつけかも知れないが面白い。西洋人の哄笑佛とするは形而下的であり、日本人の大量とするは東洋精神的であるとさへ思ふ。

布袋を譏人の辭とし、今日いふところ俗語『飯桶』と同じ意の『酒囊飯袋』に布袋とよんだのは、南部新書にも見えてゐるさうだから、少くとも宋代からであ

つたらしい。また、粉糟こなか三合をもつてゐながら、他家の女に贅ぜいするのを布袋といふのも近代に初るのではないらしい。これは他家の世代を繼ぐ『補代』の訛であり、吳中の俗諺だと、清朝の隨筆に見えてゐる。

西王母 — 王母娘娘

周作人の看雲集の「喫菜」の中に、『民間の邪教に關するものを讀むと、必ず喫菜事魔の文句に逢著する。喫菜は菜食のことであらうが、魔に事へるといふ魔は何であらうか。魔王の類でもあらうか。われわれはギリシヤの諸神が、クリスト教の世界となつてから、多く魔に變轉したことを知つてゐる。だから魔の中には、原をいへば、いくらか身分をもつてゐたものもあるわけである。魔に事へるからとて、全くひどい邪道とばかりきまつてゐるわけでもあるまい』といつてゐる。同感である。が、これとは逆に、魔から神仙に飛躍して、途徹もない大衆の信仰を博してゐるものもある。一例を擧ぐれば、西王母。

北京の東便門内の護城河に臨める太平宮は、西王母の像を祀れるに因んで蟠桃宮ともいふ。毎年三月一日から三日までを開廟の時とし、白雲觀の雜踏ではないが、その香火の盛んなることは、燕京歲時記や春明歲時瑣記が、特に一項を割くことを遺忘してゐないのでも明かだ。西王母を專祀する蟠桃宮といふのは、碧霞元君の娘娘を祀れるそれよりは多くなく、また、碧霞元君に對するよりは、民衆の信仰も較や下れるやうにも見うけられるが、北支那、滿洲における王母娘娘は、その他の女神より輕視すべき存在では決してない。

吉林の蟠桃宮は、王母を主として、斗母、觀音大士、八仙等を雜然として配祀してゐる。本廟の本山格たる本溪縣の鐵刹山に奉祀する神佛について調べてみると、乾坤洞の中央正殿には南海大士を、その東間には西王母に長眉李大仙といふを配して、西間には藥王に財神と郭祖とを配してゐる。千山、醫巫閭山などの名だたる靈山の道觀は、どこにも西王母を祀つてゐるのか、ゐないかは知らないが

吉林蟠桃宮も、鐵刹山も、ともに龍門派に屬して、同じく郭守眞の流れをくむところからすれば、王母娘娘のために、同派の寺觀には西王母を祀つてゐるのが多かりさうである。

北支那の低級な婦女子に従へば、王母娘娘は、子を授けてくれ、授けた子を健やかに成人さしてもくれる靈驗あらたかな母性愛の女神だといふ。かかる俗信がいつのころから勢力を得たのかは知らないが、地藏菩薩も、目蓮尊者をも全く支那人化し、觀音は完全に女性と見て送子觀音なるものすら創作し、さらに碧霞元君や、臨水娘娘なども案出した天才的支那人のことであるから、王母娘娘とても何も驚くことでない。筆者は、曾て濟南の南二十里の玉函山、又の名臥佛山、俗に興隆山と呼んでゐる幽靜な巖山に登つて、頂上の柏樹森々たる間に、碧霞元君殿、觀音菩薩殿などがあり、さらに三教堂といふがあつて、回教風の圓天井の本堂内には、中央に釋迦、右に孔子、左に老子を奉祀してあるのを見たことがあ

つた。そして、堂前に建てられた碑によつて、清初の創立なることと、麓から頂まで切り開いた石階五千餘尺が、康熙元年においてなされたことをも、また路傍の碑文に讀んで知つた。吉林の蟠桃宮は、最も新しく、清の同治九年に建つるところで、七十年しか経てゐないが、奉天の太清宮の前身の三教堂も、本溪縣の鐵刹山雲光洞も、ともに康熙年間に立てられたもので、濟南の玉函山頂のそれと時代を同じくする。儒佛道三教合同の傾向は、決して新しくはないのであるが、是等の實例に徴すると、三教混淆が際立つて著しくなつたのは、元、明を経て清初にあつたといへさうである。又、もし憶測が容されるならば、北方の人の授兒、育兒の母性神とする西王母信仰は、この時代において最も普遍したのであらう。ただ、玉函山の場合は、この山、古くは含山と稱して、唐の段成式が「酉陽雜俎」に、齊の含山に王母の使といふ三足の鳥がある、漢の武帝、この山に登つて玉函を得た、開かうとしたら、白鳥と化して飛び去つたとある傳説の山であるから、

三教堂の存在は、もとより怪しむを須のない。むしろ西王母を専祀する蟠桃宮があつてもよい山と考へた。そして、憶測を再びすることが容されるなら、授兒、育兒の母性神としての信仰は、淮南子の覽冥訓に、羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月とあるやうに、月を不滅なもの、女仙西王母は不老不死の仙藥を有すとの思想が、古くから神仙家あたりの頭にあり、それが時代の下るに従つて變轉し今日の母性神と化したのであらう。だから、この點からいへば、支那人式に考へて、まんざら木に竹を接いだのではないのである。蓋し三教の混淆といひ、道佛の墮落といふのは、畢竟、いささかなりとも道佛教の教理に通ずるもの言であつて、現世主義、實利主義なる最大多數の支那人にとりては、必ずしも合理と不合理とを問はぬのである。觀音、碧霞元君、西王母を仲善く一棟びだに同居せしむることなどは、いふも愚かなことである。

西王母を女仙として取扱つたのは、「穆天子傳」ばかりではなく、列子にも、

史記趙世家にも見える。けれども後世に與へた影響からして、穆天子傳を第一に推すべきである。晉の太康二年、今の河南省衛輝府治の汲縣の西南方にあつた魏襄王の墓を發掘して、數十車の汲冢書きふちやうしょといはれる夥しい竹書を得た中に、この異色ある神仙小説も混じてゐた。博學と詩賦の才とで知られた東晉の郭璞が、竹筒の漆書を、忠實に、丹念に寫しとり、これに注して六卷としたものが、太平御覽その他の叢書にも收められてゐる。その一卷から四卷までは、穆王、洛邑を發して黄河を渡り、大行山脉を経て雁門がんもんに向ひ、犬戎、酈人はいつじんの邦々を経て、包頭附近の陽紆山に達して河伯を祭り、ここで河伯の後裔に導かれて西土を窮むる。西夏の邦から涼州に向ひ、さらに西すること百六十六日にして西王母の國に至り、王母と瑤池に宴し、ついで群鳥羽を解くといふ曠原に至り、百車の羽を採集した。そして、大體、往路に従つて洛邑に歸るまでの西征記事。五、六卷は、穆王の狩獵、游行、朝貢、戰事等の記事である。最も通俗な「列仙全傳」に、母、王のた

めに、『白雲天に在り・山陵自ら出づ・道路悠遠にして・山川之れを問つ・まさ
に子死すること無きを將せば・尙ほ能く復た來れ』と謠つたとある。謠の前に、
王に女五人あり、華林、媚蘭、青娥、瑤姬、玉扈なりと、名まで明克に擧げてあ
るから、彼女を西極に住める子持の女、また、不死の女仙とする傳説思想は、こ
れ等の神仙傳によつて流布もされたらうが、汲冢書の發掘以前、すなはち西曆第
三世紀前から、一部漢人の間に行はれてゐたかも知れない。後漢の班固が撰に假
託した「漢武内傳」にいたつては、右の穆天子傳に見えた西王母記事に、他の神
仙説を引用した上、漢書武帝本紀や、史記封禪書なども織り雜へた妄誕極まる
小説であるが、しかも、その行文の華麗なところから後代の讀者を魅惑するには
有力であり、また従つて王母娘娘信仰に拍車をかけたのであらう。何の一神怪小
説がなどと多寡をくくつてはいけない。かの封神榜や、西遊記が、いかに深く支
那民衆の腦裏にしみこみ、そして彼等の似て非なる信仰を形作つてゐるかは、こ

こに更めて説くまでもないことである。夜二更の後に到り、忽ちにして西南に白
雲起るが如きを見る。鬱然として直ちに來り、逕くも宮庭に趨る。須臾にして近
きに轉ず。雲中に簫鼓の聲、人馬の響を聞く。やがて、數千の群仙が、あるひは
龍虎に駕し、あるひは白麟に乘じ、あるひは白鶴に乘じ、あるひは軒車に乘じ、
あるひは天馬に乘じ、庭宇に光耀するかと思へば、ぱつと消えて、その在る所を
知らず。ただ王母の紫雲の輦に乗せるを見ると、銀幕の映寫を見るに似たる叙述
である。そして、武帝と會するの後、侍女に命じて、更に桃果を索む。須臾にし
て玉盤を以て僊桃七顆を盛れり。大きさ鴨卵の如く、形圓く青色なり。以て王母
に呈す。王母曰く、この桃、三千年に一たび實を生ずと、群仙中の至高位にある
女仙としての威儀の盛んなことを示す一面、人間的な年増女の蠱惑的などころを
仄見せ、さらに仙桃をわかち食はしむるあたりを讀むと、東方朔ならずとも、牖
間から窺ひたくもなつたらう。又、(列仙傳には、王母、東方朔を指して、この

兒三たびこの桃を盗めりといつたのである。三國の交の青年文士などが、この小説を耽讀したらうことも、想像される。

袁隨園は、その「隨筆」の卷の八中に、西王母に關する數例の解を作つてゐるが、彼自らは解を下すことを避けてゐる。古來、異説も少くないが、現代學者の間には、仙境崑崙は西戎と同じやうな戎狄の一民族の名で、西王母はギリシヤのニンフや、スフィンクス、サイレネなどに類似した空想中の半人半獸の女神とするに略ぼ一致してゐるやうである。蓋し經史以外の書で、崑崙と西王母を説けるものは、「山海經」の五藏山經の第二卷西山經ほど明細なるはない。荒誕を極めること、この書の如きはないが、地理、歴史、神話學の各方面からしても、又、この書の如き貴重な資料はない。その書の崇吾の山から崦嵫の山にいたる間には、人間の想像に勝えたる異果、異樹、異禽、異獸、異人、異神の名が擧げられ、その各々の生態が、要領よく描き出されてゐる。崇吾の山には、一翼一目、相得て飛

ぶどころの蠻蠻すなはち比翼鳥がゐる。不周山には蟠桃を聯想せしむるに足るところの、實は桃の如く、葉は棗の如く、黃華にして赤爛、これを食へば勞れることがないといふ仙果がある。峯山（音密）にも、丹木にして黃華赤實の味飴の如く、これを食へば饑えざる異果がある。槐江の山には、馬身、人面、虎文、鳥翼の英招なる神が住む。崑崙の丘には、虎身九尾、人面虎爪の神陸吾といふがゐる、また、人を食ふ羊の如くにして四角を有する土螻がゐる。玉山すなはち穆天子傳に群玉の山といへるには、「列仙傳」にいふどころの『凡そ天に上り地に下り、女子の登仙得道する者の咸な隸するところたる』而して『西華至妙の氣を以て、化して伊川に生れたる』龜臺金母が在します。山海經は、かかる至高の女仙を、『その狀、人の如し。豹尾虎齒にして善く嘯く。蓬髮にして勝を戴く。是れ天の厲及び五殘を司る』と明快に説いてゐる。蓬髮は亂髮、勝は髮飾のこと。天の厲、五殘は、郭璞の注に従へば、災厲五刑殘殺の氣である。いやはや、女仙どころか。

杭州の方言に、幡桃兒といふがある。單に人の集合を意味することがあるが、浮浪人の會合を意味することもある。北京近郊の農民の間には、夏雲の動きによつて、明日の天氣を卜することを、王母娘娘を相る、王母娘娘が簑を着たなどといふさうだ。又、同地方の子供たちの間には、鶏卵の殻に目鼻をえがき、紙の衣うはぎ褲すくみんをつけさし、これを王母娘娘と稱してする正月遊戯の一種があるさうだ。これ等の方言や、遊戯や、女仙西王母に關はりがあるか、ないか。まだ考へてゐない。

天后聖母

北は凍結する渤海岸から、南は赤道以南の諸海島にかけて、凡そ支那人が住み華僑が分布するところ、天后廟の存在を見ざるはない。わが長崎の唐館たうくわんにも、小規模ながら、關帝廟とともに一座の廟があり、大阪の天王寺の一寺にも天后の祠があつた。福建本省に住む省民と、福建出身の華僑の間には、天后の外に臨水奶すなはち俗に『娘奶ニテンナイ』と敬稱するところの女性で、産兒をつかさどる靈顯いやちこな神があつて、その民間信仰も、正月十五日の祭事も盛んなものではあるが、これを天妃が航海、貿易など、あらゆる海に關係を有する生産者から受ける崇敬と、その祭祀香火の範圍廣く、且つ昌んなるに比すれば、娘奶は遠く及ばない。

かの満洲だけでも、その祠廟二百數十ヶ所といはれる娘娘廟に比べても、天后廟の方が、多分、はるかに多いのであらう。

天后は、天妃、媽祖、婆婆などの一般的な敬稱があり、又、順濟、靈衛、崇善福利などの歴代の封號のいかめしいものがある。その傳記もしくは傳説は、宋の太平興國四年（西歴九七〇）の莆田縣志に見えたものが最も早いといはれ、雍熙四年、景德三年と續いて縣志に載せられてゐ、宣和五年の後の杭州府志にも、その他、元史、明・清會典、續文獻通攷等の諸書にも、神靈の保佑やら、祭祀のために官員を特派したことやら、加封などの記録が見えてゐる。筆記、隨筆の類にいたりては、詔興二十九年（一一五九）の使琉球雜錄、東西洋攷、明の太監鄭和の南洋巡航に關する稗史などを主要なものとして、擧ぐるに煩はしいほど多數に上る。それは古典における天后關係の記載であるが、新らしい研究に屬するものとしては、廣東の中山大學の語言歴史學研究所一派の人々による勞作があり、彼等

の機關誌「民俗」の上、その折々に發表されてゐる。ここには周振鶴の『天后』を主として、その他の一二書から補綴し、彼女の事蹟を簡明に紹介しよう。

天后は林姓、代々福州の莆田縣の湄洲嶼に住んでゐた。天后は、五代の閩王の時の都巡檢林愿（願とも）の第六女である。母は王氏。太平興國四年三月二十三日を以て生る。生れる時、地の色が紫に變じ、祥光異香があつた。天后長じて後祕法に通悟し、休咎を豫知した。郷民で病めることを告ぐれば、立ろに癒えた。能く席に乗つて海を渡り、島嶼の間を雲游したので、神女とか、龍女とか、人に呼ばれた。これが九七〇年の莆田縣志に見えたもので、雍熙四年（九八七）の二月十九日には、彼女の昇化せる記事が、同年版の縣志に見え、さらに景德三年一〇〇七）版には、一に曰く、景德三年十月十日に昇化したとある。この後、常に朱衣をきて、海上を飛翾した。里人これを祀る。雨を禱れば靈應ありと補記し、さらに宣和五年（一一二三年）版には、宣和の癸卯、給事中路允迪、高麗に使ひ

するにあたり、海上に暴風にあひ、八隻の船の中七隻まで溺れたが、ひとり彼に乗れる船だけには、神、檣ほしらに降りて無事なるを得た。これによりて、朝廷、特に天后の祠に順濟廟なる號を賜はつたと、莆田縣志は年代を逐うて彼女の神祕話を發展せしめてゐる。

元代の天后崇拜も相當なもので、使を遣はして海神天妃を祀らしむとの記録および、一度ならず封號を加へた記録がある。明においても多く前代にゆづらず、洪武の初に、天妃に海運守護の功ありとて、五年に、孝順純正孚濟感應聖妃に封じてゐ、永樂五年には、南京の龍江關に天妃廟を建て、太常寺少卿を祭官として誕生の正月十五日と昇天の三月二十三日とに官祭を執り行ふことにしてゐる。これは三保太監の名で世に知られてゐる鄭和ていわが、南方の諸蕃國に使ひした時、天后の感應があつたことを復命したからだと「大政紀」にある。清朝も元、明と同じく、康熙十九年に加封、官祭を行ひ、黄河神と同一待遇としたが、同二十年には

提督萬正色が南征するにあたり、反風の功ありしとて、昭靈顯應仁慈天后に敕封した。

天后の生年月および昇天年月についても、定説はないらしい。周振鶴の擧げたところでは、誕生は唐の天寶元年（七四二）とするもの最も古く、宋の元祐八年（一一〇九）とするものが最も新しい。昇化の年月も同じで、古きは宋の雍熙四年（九八七）、新しきは宋の景德三年（一〇〇六）である。又、封號の進程について見れば、夫人—妃—天妃—聖妃—天后となつてゐる。即ち實在人物ではあつたらうが、總てが臆氣である。顧頡剛こぎやうは彼女の生前は女巫であつたらうといつてゐる。さうかも知れない。

天后の靈顯として擧げられたところは多いが、これを分類すれば海盜を捕へたこと、旱潦かんろうを解消せしめたこと、海上の危険を脱せしめたこと、戦鬪を助けたこと、海潮を退けたこと、饑饉を救ふたこと、疫病を絶滅させたこと等になる。「三教

搜神大全」といふ神仙縁起をかいた大衆向きの書には、天后の母陳氏が、南海觀音から優曇華を與へられ、これを呑むと夢みて孕み、十四ヶ月にして彼女を生んだとも、水旱癘疫、舟航危急に祈りて應ずる外に、善く嗣を孕むことを司ることも數へ立ててゐる。つまり、東南支那濱海の民が、遠洋を渉るにあたり、心細さのあまりに、湄洲の妙齡の一人を幻に視、これを念じたのに初り、さらに時代を追ふて全知全能の海上の女神と化したのであらう。

福州の女海神には、天后の外に蔡姑婆とも、單に姑婆ともいふがある。長樂の蔡氏の女で、名を紅亨とよび、父は明の萬曆のころ、琉球國に官たりし人。「琉球國蔡姑婆」と題する讀み本の類があるのは、それに因んだのである。天后にくらぶれば後世の人であり、全く別人でもある。

附記 西川正休の「長崎夜話草」に、野麻權現並に日御崎觀音の事なる一條があり、天后信仰が唐船によりて我が國にも齎らされたことを旁證してゐ、又、天

後の遺骸がここに流れ寄れるを葬つたとの傳説を記してゐる。一異説である。

『薩摩國に野間山あり（中略）長崎入津の唐船も、洋中に初てこの山を見る時錢紙を焼き、金鼓を鳴して拜祭せり。これより此山を野間山權現と號せり。野間の和訓は則ち老媽の唐韻の轉語なり。又、長崎の津外、七里南に、野間といへる浦里あり。高山の麓に草堂の寺あり。本尊一體、長七尺許り、行基菩薩の作にて元享釋書にいへる日御崎の觀音これなり。則ち此の高山の下を日御崎といふ。唐船も又これを遙拜す。野間と野茂と通韻にて、殊にいづれも觀世音の靈地なればなり。皆な老媽の轉韻なり。此の故に野間、野茂の兩山、ともに唐人は天堂山と號せり。』

臨水夫人

家の跡目を嗣ぐ子がないことは祖先の祀りを絶つことになる。即ち祖先に對する不孝第一である。かやうな家と祖先とに對する孝道觀念は、しばしば好色濫淫の男をして、婢妾を納れる口實の一となさしめてはゐるが、子なきは去るといふのが、七去條件の中の一となつてゐる支那である。それでなくとも、正月に門の横木に貼る春聯の『横皮』に見る常套の文句——一門五福、もしくは五福臨門の五福の一として、多子多孫を、壽と祿と共に、人間一生の念願としてゐる支那人である。滿洲、北支那の廣い一帯地方に、かの娘娘の中にも、子を授け、生れた子を安らかに育ててくれる子孫（授兒）娘娘の信仰が行はれ、特に子無き婦人にし

てこれを祀らざるはないのは、一向に不思議がるに及ばない。しかのみならず、これを子無き人妻にとつて考ふれば、子無きことは、同性の情敵がわが家の内に出現し、もし、その情敵にして子を生んだ場合は、將來、己れは名狀すべからざる悲しさと、淋しさを味はねばならぬ運命におかゝることを意味するのである。支那の婦人の子を授からんことを欲する念の熾んなことは、一夫一婦を建前とする他の國々の人にはわかりかねる。その民衆の願望を利用し、子無き愚夫庸婦の誘致策の一として、道觀の娘娘廟中、名を南海大士ととなへ奉りて、佛教の觀音を併せ祀り、佛寺内には子を授ける觀音すなはち送子觀音として、觀音を全く女性化して、參拜と寄進とを誘惑してゐる。北支那には、中秋拜月の夜に祀る廣寒宮の畫圖の上に、財神の關帝と、送子觀音との二圖を加へ、一枚の紙に印刷したのすらある。これを呆れて物がいへないといふものは、明朝以來の道佛の混淆の甚だしいことと、支那民衆の頭腦が、また彼等の願望が、いかなる程度にあ

るかを知らないからだ。

送子観音の外に、北の娘娘に對して、南方には福建の臨水を中心として、南海一帯に、娘奶すなはち臨水夫人がある。福建の各鄉村には村として娘奶廟なき村はなく、正月の元宵は娘奶の生れた日、中秋の八月十五日は娘奶の上天した日として、盛んなる祭事を營む。すなはち、北の各省において、中秋節に月餅を親戚朋友に贈り、果物蜜餞を月に供へるのとは、その形式において同じであるにしろ娘奶を祀る子無き女にかぎつては、その意味合を異にするのである。娘奶は即ち臨水夫人（娘奶の外に、あるひは大奶・陳夫人とも）の俗稱で、福建方言の娘奶は母といふ意である。また福建の俗諺に、母もしくは女によつて衣食する意氣地のない野郎を『娘奶廟祝』といふのは、これに由來した惡口。

俗間に廣く行きわたつてゐる搜神記（正しくは「三教源流・搜神大全」といひ晋の大梁の于寶の著なりと稱する偽書にして俗書）には、臨水夫人を大奶夫人と

どなへ、觀音菩薩が福州に惡氣の冲天するのを見て、その方向を指すと一指の尖から金光を放つた。その時に夫人が生れたのであるとか、唐王の皇后の難産を夫人が救つたとか、道佛を一緒にした荒誕極まる記事を載せてゐる。搜神記外の娘奶の傳記も、それよりはいくらかましといふまでで、支那人でなければ信せられさうもない。次に閩都記、林退庵隨筆などの共通した娘奶傳を抄録する。

順懿官、又の名龍源廟。古田縣の東三十里の臨水洞にあり。神の姓は陳氏。福建の下渡の陳昌の女なり。名は靖姑。劉杞に嫁す。卒する時、年二十四。臨水に洞あり。巨蛇を産す。時に氣を吐いて疫癘をなす。一日、朱の衣をきたる人あり劍を執り、白蛇をもとめて之れを斬る。すなはち神たることを知る。郷人、その神のために廟を立てて洞に祀る。廟に梳粧樓あり。宋の淳祐年間に『順懿』の額を賜ふ。元の末に廟を重修し、學士張以寧これを記せり。

母は葛氏。天祐二年正月十五夜靖姑を生む。八歳の時に教讀す。十三歳にして

詩詞歌賦皆な通ず。靖姑生れて花の如く又玉に似たり。十六歳、古田の積庄村の劉杞と婚約成る。杞は靖姑と同年にして才學あり。靖姑すでに佛を信じて嫁することを肯んせず。杞、後ちに羅源の巡檢に任じ、單身にして赴任す。靖姑は閩山の法主の許眞君の門に入り、法を學ぶこと三年、師と別るるに臨み、未だ救産の術を授からず。師、暫く留めて之れを教へんといへるも還れり。杞、古田において難に遇ふや、靖姑これ救ひ、次で同棲す。永和二年、福建に大旱あり。閩王^{びんわう}之れを憂へ、靖姑の従兄の天師陳守元に雨を乞はしめしも效なし。王怒りて守元を死刑に處せんとす。守元驚いて靖姑に請ふ。時に靖姑は妊娠中なりしが、従兄の死を坐視するに忍びず、下渡に歸り、胎を墜^{おとし}して房中に置き、自ら白龍江に赴き、髪を散らし劍を舞はして正法を施す。乃ち狂風大雨いたる。靖姑身體疲弊して古田に卒す。年二十四。靖姑生前に救産の法を學ばざりしを悔ひ、死後専ら救産に力を致さんと遺言す。

娘奶廟は古田縣臨水郷に建てられたものが最初で、それから福建各地に及び、福建人の僑旅する地方にも擴がつたのであらう。ある人は、宋の初まで、福州地方には北方の娘娘にあたる子授けの神、産^{さん}の神がなかつたので、道教の何者かが陳靖姑をかつぎ上げてそれに充つたこととしたのであらうといつてゐる。この説は合理的想像である。いづれにせよ明代に至つては、靖姑は全く産の神、子を授ける神となつてしまひ、北方の娘娘と同然の神格を具備するものと信せられ、彼女の神業を助けるものに十姉妹があり、さらに部下に三十六婆あり、さらに娘奶と同門であつた二真人があり、いづれも廟内狭しと祭られることになつてゐる。福建では、娘奶廟の年二度の祭禮に子無き女の參拜することを『請花^{チヤンホア}』といふ。廟に祈つて得た花が白であれば男の子を授かる。紅であれば女を。花をつけてぬ樹の枝であつたら子がなない。けれども、一念をこめて祈れば、白が紅となり子なきが子あるにいたる。御信心あれ、御信心あれといふわけで、南支第一の繁昌

である。

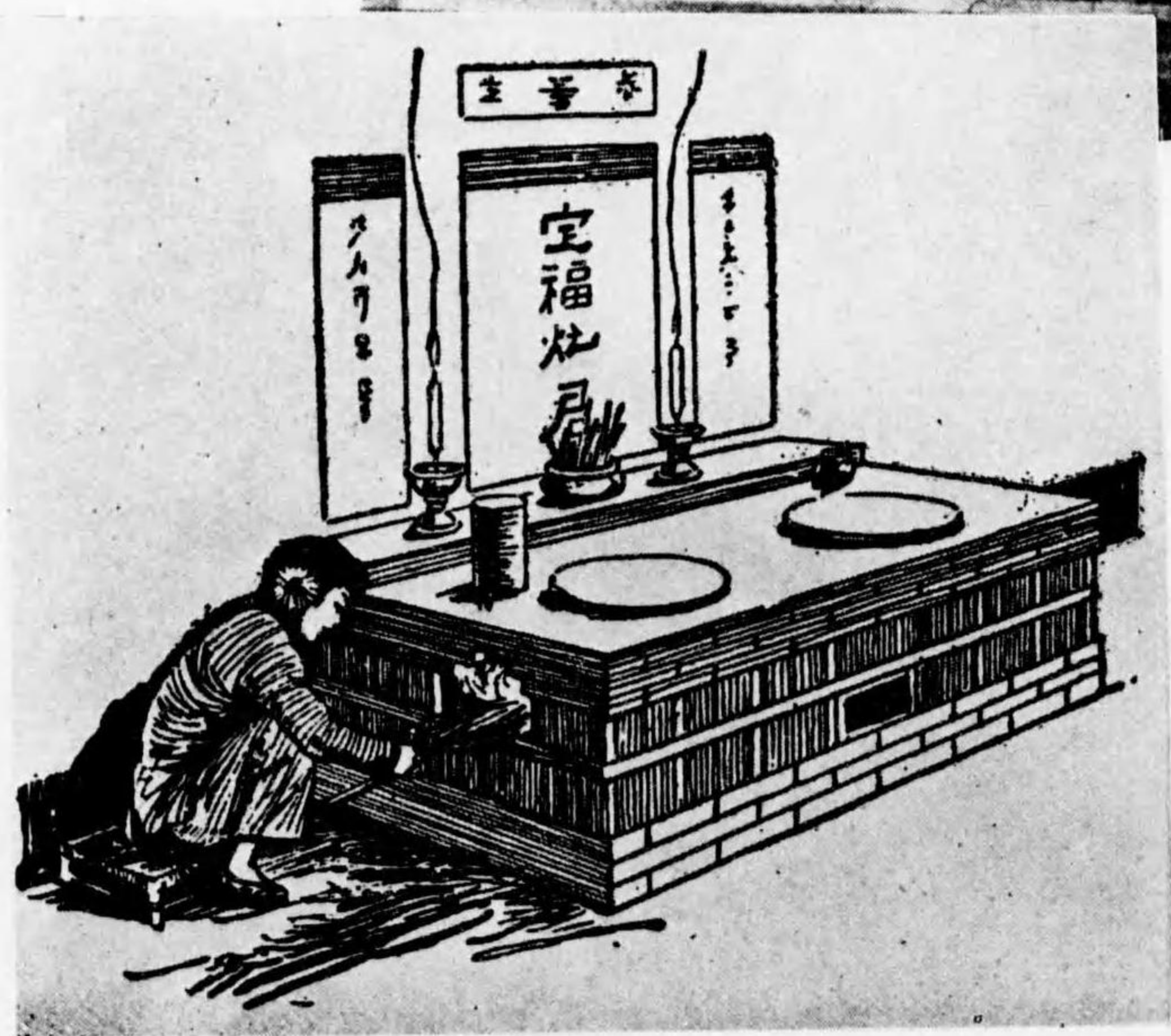
臨水夫人の外に、中南支那には道佛神いづれともわからぬ多くの授兒の神がある。けれども、夫人の香花の盛んなるには一も及ばぬ。又、夫人に對する信仰の廣さに比ぶれば、他はみなうんと狭い。



→ 哄笑佛・布袋像—上海靜安寺に祀れたる

竈神を祀る—普通民家における、外國人の筆に成る

↓



西王母像「列仙全傳」に挿まれたる



瓊霄娘娘即ち子孫娘娘塑像

樟柳神

石湖は、蘇州の盤門外にある太湖の一支脈で、范蠡が五湖に入れる處との傳説もある。湖に臨む山の一に上方山といふがあり、山上に上方寺といふがあり、寺に五通神祠がある。五通は、「聊齋志異」の著者をして、『南に五通あるは、猶ほ北に狐あるがごとし、然れども北方の狐祟は、尙ほ百計を以て驅遣すべし、江浙の五通に至つては、民衆に美婦あれば輒ち強占せられ、父母兄弟皆な敢へて喘息する莫し、害をなすや尤も烈し』といはしめしもの。それは明季のことであるが、清初にも五通神の邪説はなほ盛行し、邪淫の風、捨ておけない有様だつたから、名巡撫湯斌、親ら部下を率ゐて上方山にいたり、神像は湖中に叩きこみ、祠

は火をかけて焼いた。それ以來、五通の邪説は世人の口から消え、五通神祠は禁絶されたことになつてゐるが、その實、蘇州一帶には、家神堂として廳前に供奉されてゐたばかりでなく、又、いつの間にか、上方寺中に五通像を塑して五通祠を設け、毎年八月十七、十八兩日を祭期とし、石湖に舟を漕ぎ出し、日中に山上に進香し、夜に入れば『串月』と稱して寶帶橋の奇景賞觀に名を藉るものが、踵を接する状となつた。

五通神に賽する信徒等は、『陰債を借る』とて、一定金額を神から借り、それを資金に廻はして利得し、毎月朔望の二日神に詣でて元利金を支拂ふ形式をとる者と、『横財を求む』とて、南京、上海、鎮江あたりの都市にゐて、やくざな生活を營めるものが、定期祭日中、必ず上方山に進香し、花會やら、賭台やらを設けて五通の神助を願つたりする外に、靈魂の仲介者であると稱する私巫の類が、遠路を物ともせずして山上に集り、いかにも恭々しい態度で、神前に元寶を焼き、

香燭をささぐる。彼等私巫どもは、いづれも樟柳人を身に貼けてゐるから、誰の眼にもよく映つる。私巫の種類によりて、他に祖神とするものがあるかも知れないが、五通神は少くとも、彼等の祖師の一で、買靈の對象となつてゐるらしい。樟柳人を身に佩びて、町から町へ流して歩き、無知の男女の休咎吉凶や、過去將來の因果關係を問ふものがあれば、木偶の樟柳人に靈を與へて、直ちにそれに應答せしめることを職業とするもの、即ち右の私巫である。上海あたりでは、この私巫を道姑とよんでゐるが、地によりて稱呼は一定してゐないやうである。「輟耕錄」の三姑六婆の解に、尼姑、道姑、卦姑を三姑と説いてゐる。道姑はその三姑の一にあたるのであらう。

樟柳人（神ども）なるものは、方寸一定してゐないらしく、筆者の見たものは高さ五寸に足らず、粗ぼ眉目と肢體を備へた薄す汚い人形で、これを揮つて見、叩いて見、顛倒して見ても、内部には何の種仕掛けがありさうでなく、そして土

偶だけの重味もない忌はしげなるものだった。女巫どもは、柳の木を用つて作り七七四十九日が間、夜露にさらし、絶えず呪と祈とをささげて神靈を宿らしたものと稱してゐた。又、上海にゐる間に樟柳人の靈的動作を目にしたといふ人から聞いたことがある。彼は語つた。私巫、これに祈念をささげると、木偶は自ら動き始めて、言語といふよりは嗚啼と形容すべきに似た聲を發する。そして人のこれに問ふところあれば、細く、長く、つめたい、金屬性を帯びた聲をもつて答へる。時としては生きてゐるかのやうに跳躍し、もし人の手が觸れでもしたら、忽ち短く勁い聲を揚げる。木偶が生動し、應答するのは、靈界と人間界とを媒介交通せしめる『小鬼』が宿れるためである。假りに寡婦にして亡夫の幽冥界における生活状態と、彼の希望とを知らんことを欲すれば、小鬼を通じて知り得る。子なき女にして子を獲んことを冀ふとしたら、木偶の神靈は、彼女の希望を達すべき有効な方法と、服食すべき薬餌を指示する。かかる問答が行はれる間は、私巫は唇

を微動することもせず、全然沈黙してゐると。いづれにしても容易に信じ得る談ではなかつたが、好奇心を唆られないのでもなかつた。で、ある時、いつものやうに章炳麟翁に教を請ふと、木偶を刻むに柳材を用ふると稱するは嘘で、實は山野に自生する商陸とも、章陸ともいふ草の根で作れるもの。商陸、一名章柳、白冒などの異名もある（わが國でいふ山午莠であるらしい）。本來、激毒を有する野草で、めつたに服用すべきではないが、人の病によつては薬として用ゐられることもあるさうだが、詳しくは本草でもしらべて見よ。樟柳人については、諸家の筆記に見えるものが少くない。無論、無責任な記載ばかりではあるが、見たくば、これこれの書を漁れとのことであつた。

それは鐵環の單皮鼓を鳴らして、婆婆として舞態をなすのでもないから、聊齋志異に見える『跳神』ではない。北滿洲あたりに今も見る薩滿の巫覡の流派でもない。さりどて符呪を用ゐないから、祝由科の一類とも思へない。現に紅卍字會

あたりでやつてゐる巫^{ふけい}かとも思ふが、それは字畫として描き出されて、『音』にはよらない。あるひは、西洋の降神術などに似たのがあらうと考へるが、西洋のそれを知らないから何ともいへない。結局、樟柳人は筆者にとりて不可解な一詐術である。一隨筆には、沿街の筭^{さんめい}命者には、幼兒の生年月日を問ひ、呪術を以てこれを斃したりなぞするものがある。これを樟柳神と名づける。星卜家が争うて相賣買する。これを得たるものが人のために推算するに靈應異常なり。然れども已往の事だけを知るべく、未來に屬することには效驗がないとあつた。又、一隨筆には、たまたま術者の人のために筭命するところを實見した。彼は只だ日に八人だけしか取扱はない。往事に對して験が多い。囊中から出した樟柳神といふを見ると、童子の姿を木に彫つた方寸の人形で、人に向つて語を發し、詩數首を誦した。土を掌中に置いてその木偶を立てると、宛轉として生けるが如くであつた。

十二生肖神

福建の漳州の東嶽廟の東偏に、靈顯あらたかなりとて、婦女子の信仰淺からぬ授兒と生育とを司る女神注生娘娘の祀殿がある。その殿堂の兩旁に、人間の形をして、しかつめらしく紗帽に黼^{ほく}服した十二生肖神の像を安んじ、その肖禽^{せうきん}(禽は生物の意)は黼服の上に彫塑し、次のやうな稱呼を以て拜まれてゐる。黼といふは明清時代の禮服で、脊と胸とにあたるところに、文武官の別とその位階を示すための華麗な繡^{しゅう}文を施したものだ。

李大夫(鼠)	田大夫(牛)	雷大夫(虎)	柳大夫(兔)
袁大夫(龍)	紀大夫(蛇)	許大夫(馬)	朱大夫(羊)
杜大夫(猴)	曲大夫(鷄)	成大夫(狗)	阮大夫(猪)

北支那の色町の女たちは、胡三太爺とて、白眉、白髯の人の姿をして衣冠をつけた三體の狐（胡と狐とは通音）の畫像を祀つてゐ、北支那では、都市でも郷間でも、狐、いたち、はりねずみ、蛇、鼠の五生物に神靈を認め、この五禽を伍大家と名づけ、これに人間の姿を與へ、黼服した畫像もしくは塑像をつくつて、巫覡のこれを廟祀するのがあり、無知の郷民は、これを屋外に祀つてゐるもある。けれども、人の生れた歳の生肖十二禽を人に擬し、人の姓を與へて祭殿にいつきたてまつるのは、廣い支那のことだから、他にもあるかは知らないが、まづ珍物の一とすべきであらう。類似のものとしては、蘇州の玄妙觀の三清殿に六十花甲子星宿神像といふがあると聞いてゐるが、見たのではない。

子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥を十二支と名づけ、これに鼠、牛、虎、兎、龍、蛇、馬、羊、猴、鶏、犬、猪の十二生物を配して十二生肖といふこと。さらに火、木、土、金、水の五行をおのおの二つに別けて十干といひ、

この十干と十二支とを相配合して、曆の上の年、月、日、時にまで發展せしめてゐることは、黃帝の師にあたる大撓といふ賢人が作つたといふことになつてゐ、蔡邕の月令章句にも、大撓五行の情を探り、斗機の建るところを占ひ、ここにおいて、始めて甲乙を作りて日に名づけ、これを幹といふ、子丑を作りて月に名づく、これを枝といふとあるのは、もとより一話説に過ぎないであらう。假りに黃帝軒轅氏といふがゐたとしても、天文曆數の學問だけが、西曆紀元千九百年以前の草創の世に發達してゐたとは考へられない。後人が、漢代以後に起つた五行説と、うまく抱合はさして作爲したものと見るのが、蓋し妥當である。しかも、殷の都であつた今の河南省安陽縣の殷墟から、無數に發掘される獸骨や龜甲などに、十干、十二支（このころの十干、十二支は單なる日の符號らしい）を組合せられたものがあるのを見ると、おそくとも、紀元前四世紀ごろから、紀年その他に應用されたと解すべく、少くとも、すでに二千餘百年を経てゐる。で、迷信ではあ

るにしろ、十二生肖の動物に衣冠束帯さして、人に擬し、神に擬するのもありさうなことではある。

「通書」とよばれてゐる支那民間の通用暦は、近年、迷信打破運動によつて禁賣に附せられてゐるが、依然として出版され、太陽暦は、わづかに官署や、學校などで採用されてゐるに過ぎない。それ等の通書には、電報に用ゐられる符號としての數字や、朱子家訓しゆしかくんなどを加へた大部のものから、陰陽暦を對照し、それに二十四氣節、禁忌などを加へた簡單なものまであつて、一概にはいはれないけれども、月に配するに十二支獸しじゆうを以てし、男女九宮生屬きゆうぐせいぞくを表示し、九星、喜神方、四絶日、四離日などを採録せざるものとは全く無いといつてよい。そして、これ等の通書が一般に行はれてゐるだけ、支那民衆が、それによつて支配されてゐることはないふまでもない。行事も、歳時も、除外例に屬する國民政府新定の孔子祭や、革命記念の双十節や、孫總理忌辰などの三日の外は、ことごとく太陰曆すな

はち通書によつてゐる。かの新人と見られてゐ、自らもおそらくは新人を以て任じてゐる林語堂の如きすら、舊年末、舊正月の舊慣例には、斷じて屈服しないと力みかへりながら、しかも、その時が來て、彼の細君や、女の召使などが、世間なみに儀式の諸準備にとりかかると、彼自らも城隍廟に出かけて、正月の買物をしこたま兩脇にかかへてかへる矛盾さを、苦笑とユーモアとを以て叙述してゐる。干支、五行、陰陽、風水、禁忌を迷信として支那人から取去り得るとは、斷じて考へられないことだが、もし假りに取去り得るなら、それは、おそらく、支那民族そのものが同時に滅亡することだらう。

わが國にも行はれてゐる「梅花心易」といふ俗書（多分、明代の僞作だらうといはれる）に、宋の大儒の邵康節せうかうせつが、ある時、瓦枕ぐわらんを枕にして午睡してゐたのに鼠が出て騒ぐので、頭にしてみた枕をとつて鼠に投げつけると、當りはせず二つに碎けた。と見ると、内面に十七字の文字があり、『この枕、卯の年四月十四

日已の時に鼠を見て破る』と書かれてゐたので、それから彼はなほ一心に易の研究に入つたとある。これは、わが國で、陰陽博士阿倍晴明あべせいめいの作るどころといはれる筮篋抄ほきせう（多分、足利氏の末ごろの偽書）に、七つの惡日をあげ、三隣亡日などと特筆してあるのと、似たり寄つたりのことで、近代人的な有識者には、一喙きまにだも値ひしないことだらうが、かかる書がある限り、信ずるものも出て來ないとは保障されない。

兪樾ゆあつ（曲園）を近代における大儒と稱するのに對し、誰も異議はなからう。「春在堂全集」だけでも、實に大した述作である。この學者は、意あつて迷信を獎勵したわけでは決してないが、「曲園襟纂」三十六に、十二生肖に關して次のやうに書いてゐる。『相傳ふるや古し、法苑珠林に大集經を引いて曰く、東方海中に琉璃山あり、一毒蛇、一馬、一羊あり、聲聞の慈を修む。南方海中に、玻瓈山はりさんあり、一獼猴びこう、一鷄、一犬あり、聲聞の慈を修む。西方海中に銀山あり、一豬、一

鼠、一牛あり、聲聞せうもんの慈を修む。北方海中に金山あり、一獅子、一兔、一龍あり聲聞の慈を修む。一日一夜一獸をして游行教誨せしむ。七月一日鼠、初めて游行し、聲聞の乘を以て一切の鼠身を教化し、惡業を離れしめ、善事を修めんことを勸む。是かくの如きの次第、十二日に至り鼠復た還りて行く』目的は無論それだけでなく、その結果においては、これも十二生肖説を肯定するやうなことになる。迷信打破。いづこの國においても容易な業ではないのである。

はんきりやう　もうきやうぢよ
范喜良・孟姜女

萬里の長城に關する多くの傳説のみに、貞女の鑑かがみとされてゐる孟姜女と、その夫の范喜良との哀れな物語がある。范喜良は、萬喜良、萬紀良とも、また杞梁とも三四様に書かれてゐる。唐朝の末の有名な詩僧で、寶月禪師とよばれた貫休の詩に

秦之無道兮四海枯　　築長城兮遮北胡

築人築土一萬里　　杞梁貞婦哭鳴嗚

といふがある。これで見ると、范喜良の傳説は支那古代における人身御供ひきみごくらうの習俗を語るものの一として、古く唐代から行はれてゐたことが知られる。また、錢南

揚なる人が、南方に行はれてゐる宋元の戯曲百一篇を輯あつめた宋元南戲百一錄などを見ると、元代の戯文にも、孟姜女が花園の蓮池で、玉の肌あらはに水浴してゐるところを、築城の苦役から逃亡した范喜良にかいまみられ、それが機縁あひかりとなつて結婚するが、翌朝は早くも范喜良は捉へ去られるといふ筋を描いてゐる。現に南方各省の隅々まで行はれてゐる孟姜仙女寶卷とか、あるひは單に孟姜女と名づくる各種の戯曲、小説、歌謡の類は、いづれも近代の所産ならざるはないが、右の錢南揚などの輯めたものなどを見ると、宋元時代も唐代にひきつづいて、一層盛んに孟姜女、范喜良の傳説が行はれ、今日まで少しも衰頽のなきことが知られる。

孟姜女といふは何人か。范喜良といふは如何なる人か。現に長城の東北端の山海關近くに存する姜女廟、即ち貞女祠は、宋以前に創建されたものらしく、文天祥の

秦皇安在哉・萬里長城築怨

姜女未亡也・千秋片石銘貞

といふ楹聯があるといはれてゐたもの。その後、久しく荒廢してゐたが、明の萬歴年間に一度、清の康熙年間に一度重修し、さらに民國十七年に一度、都合三度目のものが現存の廟である。この地方で傳へるところでは、姜女の姓は許、(孟は年長せるものの意) 陝西省同官の人、その夫の范郎(郎は郎君の郎の意)が築城の夫役から久しく歸らぬので、彼女は衣を作つて自らこれを携へ、遠路はるばると築城の地までたどりつくと、哀しや夫はすでに死んでゐた。彼女もまた城に向つて痛哭して遂に世を早めたといふのである。これによれば范喜良も、孟姜女も、明かに南方人ではなくて、西北支那人である。長城の所在や、孟姜女といふ稱呼からすれば、西北支那人の人であると解した方が自然に近からう。「詩」にも二ヶ所まで、美しい孟姜とあるやうに孟姜といふは春秋時代には『貴女』を意味

する總稱で、特定の人を指して呼んだのではない。その由來するところは、春秋時代、齊周の二國は世々婚姻を重ねてゐるが、齊は姜姓である故に、と説かれてゐる。だから、貞婦孟姜女が傳説上の女性でなくとも、もしくは、傳説上の架空の女性であるにしても、黄河以北の西北支那人とする方が似つかはしいのである。しかるに、蘇州人などは、范喜良(萬喜良)は蘇州人であるとなし、江陰あたりの土俗の間には、春水と清溪を聯想せしめる銀魚―しら魚、俗にいふ麵條魚―を孟姜女の肉が化したものなどいつてもゐる。また、浙江、廣東に行はれてゐる『孟姜仙女寶卷』には、始皇、姑蘇に萬喜良といふものがある、一人で能く萬民に抵る(あた)どの童謠を聽き、直ちに彼を捉へしめたとある。江蘇で行はれてゐる寶卷には、右の童謠と同じく、姑蘇に萬喜良あり、一人能く萬人に代りて亡ぶ、後ち長城に封じて大王となす、萬里長城永く堅剛なりといふのを擧げてある。『寶卷』といふは、もとは佛經を俗謠化したのであるが、今は一種の戯文となつてゐるもの。

秦始皇は、その五十年の生涯に、天下を統一し、中央集権制を確立し、侵略と外征に成功し、また一面、大土木工事を興して、民衆に力役と兵役を強課した専制者である。外敵防禦のために長城を築いたものは彼に始るのではない。齊の如きは彼以前において全長一千餘里と傳ふるものを築いてゐる。彼は新に長城を築いたといふよりは、むしろ燕趙の長城を修理利用したのであるが、彼以前に彼ほどの富強な國を樹てたものがなく、また彼ほどの専制政治を行つたものがないところから、長城といへば萬里の長城の意、その長城は秦の始皇が築くところと、今にいたるまで一途に思ひこまれてもゐるのも無理はない。范喜良といふものが、果して實在人物で、秦の長城工事に苦役したかどうかはわからないが、始皇即位の第三十二年に、將軍蒙恬をして匈奴を討たしめる時には、兵三十萬を發したとあるから、匈奴平定の後長城を築く際にも、夫役の人數と、戍兵として長城に配置した人數とは、三十萬を何倍何十倍した夥しさであつたらう。北齊が天

保年間に今の八達嶺あたりの長城を築くにあたつては、民百八十萬を發したとある。百八十萬は多きに過ぐるやうな感もあるが、なまじいに否定はできない。始皇は傳統と舊習を顧慮するやうな弱い性格の人でなく、國都の咸陽を繁昌させるためには、天下の富豪十二萬戸を移したものである。長城修築には、現代人たる我等の想像も及ばぬ多數の民衆を使役したと考へて間違はない。そして勞役に堪えずして死する者も多かつたことと、彼等を強制して假藉しなかつたこととは當時の民歌に『男を生まば慎んで擧る勿れ・女を生まば哺はすに舗を用ゐよ・見すや長城の下・屍骸相支柱す』といふのがあつたといひ、張籍の築城曲に

來時一年深積裏

着盡短衣渴無水

力盡不得拋杵聲

杵聲未定人皆死

家家養男當門戶

今日作君城下土

とあるのを見ればわかる。范喜良と同じ最後を遂げて、長城の土と化した不幸な

苦役者は、幾百幾千人に達したのであらう。従つて孟姜女が彼の妻であつたと思はれば、彼女に似た不幸な女性の數もまた少なくなかつたに違ひない。しかも、たまたま、この兩人が、何かの理由で、不幸な一對の男女の代表人物として、後世に傳説されたものでもあらうか。

攷證は筆者の欲するところではない。が、ここに范喜良傳説について、附け加へることを忘れてならぬのは、宣統三年、今の上海縣の北半の城壁をどり拂つて現在の道路を開く際、城の牆中から范喜良の石像を發見した一事である。支那の民俗研究家たちは、城を築くにあたつて、人間の生贄をささげて禳災もしくは厭勝とする古代習俗がのこつてゐて、上海縣城を築くにあたつては、人に代へて俑を用ゐたのであらうと、この范喜良の石像を解釋したのであつた。今も北京で行はれてゐる故事に基く常諺—歇後語といふ種類の上半だけをいつて、後半はわざといはずに、その意をさとらせるもの—の一に、『填了餽了』の意義に用ゐられ

るところの『孟姜女的男人』といふがある。これも解し方の如何によつては近代の築城その他の大土木事業には、孟姜女の夫すなはち范喜良の俑を埋める習俗の存在を語るものであるかも知れない。城だけではなく、橋を造るに、決口を填むるに、閘門を築くに、その他の大工事にあたり、神明の祐助と加護とを祈るために、人身を御供とする祭禮を行つた例は、近代においても、これを擧ぐることが至難ではない。事實の有無は確かかぬが、民國二十六年の頃の支那新聞で讀んだ記事に、無錫の東亭鎮附近の新塘橋といふ地に一製絲廠を新設した資本家が、その落成前から一童孩を廠内に撫養し、毎日魚と肉とに飽かしめておいたが、さて、いよいよ竣工せんとする時、その孩兒を殺して煙突の血祭にささげたといふ慘話があつた。現代さへかやうなことが傳へられるのであるから、上海縣城の石像は俑であるとしても、その他の場合に俑を以てせずして現人を用ゐたことが、近代においても必ずしも絶無だつたとはいへぬだらう。

浙江の紹興に傳はる俗間の物語に、次のやうなのがある。明朝のいつのころにか、湯紹恩なる知府がゐた。海潮が満つれば、時として農田に衝激し、海水が落ちるにあたりては、河の水が潮とともに海中に流れ去り、そのために農田は乾ききり、農民が難澁をするのを見かね、彼は濱海の三江に應宿閘なる閘門を修築する案を立てた。所が、着手すると、一次三翻、忽ち水の爲に冲激された。湯知府の痛心は一方でなかつた。悩みぬいて寝た或る夜の夢に、神ありて、彼に現れ、木龍の血を用ひて閘口を膠合したがよいと垂示した。翌朝、彼は前夜の夢を考へ込んでみると、不圖、學校に出かけ行く一兒童の書包に、莫龍とその姓名をしるしてゐるのが眼に入つた。その刹那に彼は、はつと神明の垂示を悟つた。で、いきなり、その小學生を捉へ去つて、激浪に叩きつけられてゐる閘口の底深く、木頭石塊とともに沈下すると、生血が水面に浮流すると見る間もなく、閘門の基礎は成つたといふのである。

これに似た傳説は、黄河の水患多き山東の濟南にもある。時代と場處とは明かでないが、某郷の隄防が決潰した。決口が大きくて堵築が容易でない。工事監督者は神助を求むる外はなかつた。と、夢に神ありて明日正午、汝を救ふものがあるとの告げであつた。正午にいたると母に伴はれて擋子とよばれる幼児が通り合はした。工事監督者は彼の母親がよぶ名によつて、神夢に符合することを知り立ころに幼児をもつて決口の水裏に投じ、隄防膠合の難工事、すなはち彼等の術語で『合龍』を完成したといふのである。前の莫龍、木龍と、この合龍とは發音が極めて近似してゐること、犠牲となれる幼児の名が擋子なること——擋、fang、塤擋といへば收拾と同義となり、俗に借りて儻の字を用ふる場合も多いが、儻の字は遮遏するの意。また花嫁の介添の意)の二點に注意を要する。筆者には何もわからないが、この南北の二傳説は、どうやら同根に出たらしい氣がする。

わが國の岩見重太郎を少女にし、狝狝を大蛇とした人身御供の傳説には、法苑

珠林に見える李誕の寄（庸嶺の大蛇を殺して越王の妃に聘せられたと傳ふる）なごもある。が、ここには秦の長城に關したもののだけにとどめる。人體を犠牲とする習俗は、歐羅巴の古代にもあると聞く。知らず、ドミチヤヌスが築いたライン・ダニユウブ間のリメスにも生贄いけにえの傳説があるだらうか。

二郎神

揚子江の流域ならば、上は四川省から、下は江南諸省まで、又、北ならば河南、河北にも、各處に二郎廟といふがある。蘇州では、六月二十四日が二郎神の生日にあたるとて、葑門内の廟には市が立ち、瘍やうを病めるものは、白色の雄鷄たんざりを供へて祝禱する。「清嘉錄」に、長洲志と常熟縣志とを引用せるものを見ると、この二郎神は、趙真君とて、名は昱いく、灌州の人、隋に仕へ、大業年間に嘉州の太守となつた。時に蛟患かうんがあつたので、水に入つてこれを斬つた。卒せる後、嘉州の人、霧中に白馬に乗つて流れを越えるものを見たところ、彼であつた。そこで灌口に廟を立てて灌口二郎神と號した。真君に封せられたのは、宋の眞宗の時で、

瘍を患へるものが祈ると、直ちに神験がある云云。又、「堅瓠集」を引用して、六月二十四日は、清源妙道眞君の誕辰。吳の人、これを祀るに必ず白雄鶏を用ふる。久しくその故を解しなかつたが、陳藏器の本草拾遺に、白雄鶏の生れて三年なるものは、能く鬼神のために役使せらるゝとあるのを發見し、初めてその理由がわかつたとある。

「清嘉録」に引用された右の二記事は、大體、「三教大全」と同じであるが、同書は詳細を極めてゐる。曰く『清源妙道眞君は、姓趙、名昱、道士李班に従ひて青城山に隠れてゐた。隋の煬帝が、その賢なることを知つて、起たしめて嘉州の太守とした（今の樂山縣、宋時代の嘉定府）郡左に冷と源といふ二河が流れてゐた。その犍爲にあるものに、老蛟が棲んでゐて、春夏に洪水を漲らしては人民を傷めた。昱大いに怒り、船七百艘、甲士千餘、人民萬餘を發して、江を夾んで天地もゆらぐほどに鼓譟せしめ、かの老蛟を狩立てた。そして自らは刃を持つて水

中に飛びこんだ。しばらくすると、水の色が赤くなり、石崖にぶつつかる波の響が雷のやうだつた。と見ると、昱は右の手に刃、左の手に蛟の首を持ち、波の上に躍り出たのであつた。この時、昱を助けて水中に入れるものが七人あつた。七聖といふのがこの人々である。昱、その時二十六歳。隋の末に天下が亂れると、彼は官を棄ててどこかに隠れてしまひ、その最後はわからない。その後、嘉州に洪水があつた際、青霧の中に、白馬に乗れる人が、數人を従へて、鷹犬彈弓を携えた狩獵姿で波の上を過ぐるのを、蜀中の人が見ると、それは昱であつた。そこで彼等は彼の徳に感じて、灌江口に廟を立てて祀つた。俗に灌口二郎といふが是れである。唐の太宗の時、神勇大將軍に封じ、明皇（玄宗）が蜀に幸した時に、赤城王を加へた。宋の眞宗の朝、益州が大いに亂れて、張垂崖を蜀に遣はされたことがあつた。張は蜀に入つた後、二郎祠に祈り、その神靈の助けで克つた。そこで、彼の奉請に基いて清源妙道眞君と追尊されたのである。』

趙昱を二郎神とし、煬帝の時の嘉州太守とし、蛟害を除ける功勞者とし、唐代に加封されたとする事は、唐の文豪柳宗元が「龍城錄」にも見えるとて、姚福均の「鑄鼎餘錄」に引用されてゐる。それによると、趙昱、字は仲明、兄の冕とともに青城山に隱栖してゐた。嘉州太守たりし時、蛟害を除いたので、州人から神事されて、灌江口に廟食した。太宗文皇帝から神勇大將軍の封を賜はり、上皇（玄宗）の蜀に幸された時、赤城王を加へ、又、顯應侯に封せられた。昱時に二十六歳とある。これによると趙昱の二郎神説も、唐代から行はれてゐたと解せられないことはない。が、現地の四川省灌縣においては、明白に趙昱でなく、隋代の人でもなく、確實に蜀の太守李冰とその子二郎とである。

灌縣は成都の西北約百六十五支里の地にある。ここには秦時の蜀の太守李冰が岷江の疏水工事の遺蹟として聞えてゐる外に、長さ九十六丈の竹索の釣橋があるので知られてゐる。成都を訪へる外國人の見物に行く者も多い。縣城は山を負ひ

江に臨む。江は即ち内江で李冰の鑿つところ。縣城の西門を出で、江に沿ひて山道を行くと鎮威關といふがある。古への玉壘關である。關を下つて江岸に出ると、三座の大きな廟が見える。東にあるのが禹王廟、西にあるが楊泗廟、中なるが二王廟すなはち二郎廟で、一に川主廟ともいふ。（四川で川主廟といふ時は、李の子二郎のみを指すかと思へる節もある）廟には李冰とその子の二郎との木像を祀り、別に小殿を設けて一女體の像を祀つてゐる。夫人であらうとのことである。廟は遠近の參詣者で充たされて、香燭常に絶える時がなく、蜀人の信仰は禹王廟に亞ぐといはれる。廟前で西から來た岷江の水が分れて二となる。その間に長い中洲が横はる。洲の此方なるが内江、彼方なるが外江で、洲の上手の尖端を分水魚嘴とよんでゐる。竹の大釣橋は、ここを中心として架せられてゐる。分水魚嘴から流れに順つて縣城前にいたるところに、内江に蒞み、一大巖塊が、がちりと且つ屹とばかり地軸から生ひてゐる。有名な離堆である。堆の上に廟と亭

とが設けられてゐる。廟を伏龍觀といひ、古くから李冰を祀つてゐたものと見え、宋の陸游、ここに遊んで、孫太古の畫ける英惠王即ち李冰の畫像を拜し、七言の長詩を賦せるのが傳はつてゐる。亭に繞らした石欄に倚つて江中を下瞰すると、眞に壯觀を極むる。堆に激する江流未だ渦を成すに及ばずして、霧と化し、霰と散つて凄まじい。瞿塘、巫峽を開いて大水を治めた神禹に亞いで、李冰と二郎とが神と祀られるのも、ここに來て見ると、初めてまことに所以あるかなと感ずる。

彼が兄の冕とともに隠れてゐた（鬼谷子の薦めで下つたとの話もある）といふ青城山は、灌縣の西南約六十支里にある。峩眉山に比すれば山彙は小さいが、名山としては峩眉と並び稱せられて、成都の人は避暑地として遊びに行く。成都からすれば西北約百支里ほどにあたる。高さ山下から三千尺と稱するが、その中腹までは山駕がある。山上に大廟（名を忘る）があつて、旅店ではないが請へば、

快く宿泊さしてくれ。廟は唐代すでに存在したのであらう。岑參に青城山と題する五言の一律がある。

李冰の功業に關する記録としては「史記」の河渠書と「漢書」が擧げられる。二書ともに文字は同じで、蜀守李冰、離軍を鑿ち、沫水の害を避く。二江を成都中に穿つ。この渠皆な舟を行るべく、餘あれば則ち溉ぐに用ゐ、百姓その利を饗く。過ぐる所に至つては、往々その水を引く。田疇に溉ぐの渠、萬を以て計ふとある。史記に碓、漢書に壑を用ゐてあるが、同じく堆の古字である。ところで、彼の事業が人間業とも覺えぬ大事業であつたからでもあらうか、後漢、南北朝のころになると、神怪な傳説が附會されることとなつてゐる。「括地志」に風俗通を引ける項を見ると、略ぼ次のやうである。

『秦の昭王、李冰を蜀守たらしむ。成都縣の兩江を開き、田萬頃に溉ぐ。江神、女二人を娶るべしとす。冰自らおもへらく女と江神と婚するなりと。因つて江神

を責む。忽ち見えす。ややありて二蒼牛の江岸に闘ふあり。氷還りて官屬にいつて曰く、吾闘ひて疲れ果てたり、まさに相助けざるべけんや、南に向ひて腰中に白きものをあてたるは吾にして、白きは吾が綬なり。主簿、北に面せるものを殺す。江神遂に死せり。』

後魏の酈道元の「水經注」には、右の風俗通の記事が、氷、刀を操つて水中に入りて河神と闘つた後に殺し、遂に水路を平かにしたことになる。唐の「成都記」その他には、氷、牛形に化して江神の蛟と江中に闘ひて勝たず、數百の卒に強弓を持たしめ、自らは白練で身を束ねて卒等に自他を識別せしめ、記なきものを射らせて殺したことになる。それが宋代に入ると、さらに李冰に二郎とよぶ子があつて、父の蛟と闘へる際、夢によりて父子相感應するところあり、二郎、水に入りて父を助けたとの話説が附會されたやうに思へる。但し「四川總志」は、何に根據したのかは知らないが、李冰傳として、湔山に至り、水の民患

を爲すを見、その子二郎をして三石人を作り、以て江流を鎮め、五石犀を以て水怪を壓す。離堆山を鑿ち、以て沫水の害を避け、三十六江を穿ちて稻田に灌漑せしむ。國、天府と號し、野、陸海と稱す。冰の功偉なりと特筆してゐる。そして、その石犀五頭の二頭の中の一頭といふのが、高等學堂隔壁の石牛寺——漢代に創建された故の聖壽寺趾——におかれてゐた。長さ約四尺、高さ約三尺、處々剝落してゐたが、四足ともに具はり、面鼻もなほ全く、近代の作とは何人の眼にも見えぬ古物で、四川總志にも記載せられ、四十年前までは、遊蜀の日本人で、これを目撃したものもあつた。が、大正十三年、遲塚麗水氏が成都を訪ふた時には、すでにその所在が失はれてゐたことである。これは餘談だが、四川の現地において、いづれ假託ではあるにしても、李冰の治水には可なり古くから附會された神怪談があり、又、彼一人の事業でなくて父子協力であつたことが信せられてもゐたらしく、はるか後世には、父よりはかへつて子を主體のやうに祀つた

神廟もできたらしい。王士禎の康熙三十五年における「秦蜀驛程記」の四月二十九日に、『四川布政使、成都知府と共に、江瀆廟に詣でた。祭禮を畢れる後、殿宇の神像を視ると、一年少の金冠束髪せるものが安んせられてゐた。知府はこの神を三閭その左右に二神女の像の南面せるものが安んせられてゐた。故と神禹廟と李冰祠とがあつた。當に舊蹟を稽へて之を釐正すべきである』と、地方官が神名をも知らず、ただ形式的に陪祭せることを歎いてゐる。現地においてさへこの通りとすると、遠隔の地の他省において、訛傳が訛傳を生み、神怪談に神怪談が附會され、又、敷衍されたことは、毫も怪しむに足らぬのであらう。

李冰と二郎との封號も、時によつて同じでない。諸書に散見する所を拾ひ上げると、北宋には李冰廟を廣濟王に、又、靈應公に（朱子語錄には、近ごろ二郎廟に許多の靈怪あり、彼の第二子なるもの出來せりとある。又、張魏公がその廟に

禱れる夜の夢に、二郎が現はれ、王號を恢復されたいと請ふたとある）南宋の開禧年間に、二郎神を護國聖烈照惠靈顯神祐王に、元の至順年間に、李冰を聖德廣裕英惠王に、その子の二郎を英烈照惠靈顯仁祐王に、清の雍正年間に、四川巡撫が二郎のために封號を請へるを斥け、父の功を主とすべくして、子の二郎のためのみにすべきではないとて、李冰を敬澤興濟通佑王に、二郎を承績廣惠顯英王に封じたとある。なほ彼に對する祭祀は、宋代に最も盛大を極めたらしく、且つ四川現地では、祭祀には羊ばかりを供へる例であつたため、所用毎歲四萬餘頭。果ては羔まで用ゐられることがあつた。で、羊の税で省の収入が増加したともある。これを要するに、灌口二郎神はわかつてゐるやうで、正確にはわからない。今後も支那の史家、民俗學者等にとりて、興味深い研究題目であらう。灌口二郎神でなく、單に二郎神と稱するのは、他にも二三あるけれども、みな省略した。

劉 猛 將

たまたま周作人の「談龍集」を読むと、巡禮行記と題して、わが叡山の慈覺大師の入唐求法巡禮行記を紹介し、兼ねて行記中に見えた唐の開成、會昌年間の見聞三則を抜書きしたものに逢着した。巡禮行記は初めて聞く名でもなければ、初めて読む書でもないが、周作人が興味を覺えたことに興味を催し、書架を探つて「入唐五家傳」を得、周教授が擧げた一の『乞糧食』の項を、更めて讀み直した。原文によると、慈覺大師は次のやうに前書きし、

登州、文登縣より此に至る。青州は三四年來、蝗蟲の災起り、五穀を喫却し、官私饑窮す。登州の界にては専ら橡子を喫して飯となせり。客僧等、此の險處

を経て、糧食得るに難し。粟米一斗八十文、粳米一斗一百文、糧の喫すべき無し。便ち狀を修め、節度副使張員外に進め、糧食を乞ふ。

この結果、大師は張員外から、粳米三斗、麵三斗、粟米三斗の施しをうけ、餓死を免れてゐる。時に開成(840)五年三月二十五日。談龍集には引用されてゐないが、大師は、それから四日後の三月廿九日にも、地方長官たる尙書監軍に齋飯の施給を請ふ書を上つてゐ、四月三日、平明を發して益都に入らんとする中途では、尙書が諸神廟に雨乞ひしてゐるのに出會つてゐる。

ここに入唐求法僧の巡禮記を引用したのは、巡禮記を説かんがためではなく、實は支那における蝗害が、いかに想像以上に甚だしいか、それによりて被害地の民が、いかに苦しみぬくかを説きたいためである。わが國にも享保十七年九月、畿内、南海、山陰、山陽、西海の國々にわたりて蝗災あり、たづきななき者、道路に物を乞へど、與ふるもの稀れなれば、飢死するもの夥しく、公儀より救米を賜ふ

と記録されてゐるやうなこともあるが、支那の蝗害は、これを天災の一と見做してゐるまでに甚だしく、特種な『荒政』なる救済方法に關する一部門をなすまでとなつてゐる。「太平廣記」に晋の天福(936—943)の末の、慘狀につき、玉堂閒話を引いたのを見ると、この世の事とも思へない。云く天下大蝗、連載解けず、行けば則ち地を蔽ひ、起てば則ち天を蔽ふ。禾稼草木、赤地遺すことなし。その蝻(羽翼未だ成らざる蝗の幼蟲で、跳躍して行くもの音ノゴ)の盛んなるや、流引數無く、甚しきは河に浮び嶺を越え、池を踰え壑を渡り、平地を履むが如きに至る。人の家舎に入るも、制禦する能はず、戸を穿ち牖に入り、井溷は填咽し、牀帳を腥穢にし、書衣を損齧し、積日連宵、その苦に勝へざらしむ。鄆城縣に一農家あり、豕十餘頭を豢ふ。時に陂澤の間において、蝻の大に至るに値ふ。羣豕豨躍りて之れを啗食し、斯須にして復た飢き、運動する能はず。その蝻も又飢る、羣豕を啖齧し、堆積の若きあり。家竟に困頓し、之れを禦ぐ能はず、皆な蝻

のために殺さる。癸卯の年、(943)その蝻皆な草木を抱いて枯死し、天のために生殺さるるところとなれり、と。この玉堂閒話の一を、もし誇大に過ぐるとする人があるならば、それは未だ支那の蝗害の實際を目撃しない人と斷定してよい。蝗軍(支那人は群の字に代へて、しばしば軍字を用ゐてゐる。確かに恐るべき大軍である。)の空を蔽うて過ぐる時、その羽音は重爆機の幾編隊かが連続快駛する如く、飛翔中に翼を折り脚を損ねて、地上に落下するさまは霰さながらで、それが汽車の軌道にでも堆くになると、車輪は轆殺された蟲の油で空廻りし、遂には進行が不可能になるのである。そして、もしこの大軍が通過せず、一たび地に下りて畑の物を食ひ出したら、一日にして青い物を見なくなる。ただに稻禾ばかりでなく甘蔗のやうな割合に堅いものでも、たちまち幹ばかりとなり、やがて枯死する。だから農民の蝗を不可抗力の天災と同一視し、蝗に關する迷信——「鶴林玉露」に、蝗災が大兵後に來ることが多いので、戦死者の冤魂が化したのだとの説

を載せてゐる——が多いことも、これを肯定すべきである。又、農民の間に、神威を藉りて蝗軍の襲來を防禦すべく、特に神を設けて祭祀怠らざること、また理解するに難くないのである。

北支那の農家が奉祀する蟲王爺チュンワンイェなるものは、禾穀くわこくの蟲類一切を管理する神で、六月六日をこの神の祭日とす、農民は植物の害蟲を驅除せんことを禱ると「滿洲國禮俗調査彙編」に見えてゐる。神の本體はわからぬが、その蝗軍驅除の神たるは明かで、粗末な木版の畫像の農家に貼られてゐるのも、滿洲、北支那では隨處に見かける。が、一般蟲類でなく、専ら驅蝗神として祀られてゐ、且つその祭祀の盛んなのは、蘇州の猛將であるだらう。

猛將の廟は、蘇州城の内外だけで五ヶ處ある。その中で『大』の字を加へて大猛將堂といふのは、吉祥庵にあるもので、一月十三日を神誕とする。清朝の雍正十二年に詔ありて、冬至後の第三戌日と正月十三日に、有司をして祭を致せしめ

られることになつてゐた。もつとも、蘇州の坊巷、附近の郷村で、正月元旦に天曹神會といふを催し、猛將廟を祭るとて、老人子供打ち雜りて行列をつくり、金を鳴らし鼓を撃ち、城市を巡遊して、富家の米粟、金錢の寄附をも受け、十五日もしくは二十日間繼續したことは、清朝に始つたことではなく、あるひは、元、明にも溯り得る古くからのことであるらしい。今日でも吉祥菴の大猛將堂の祭典は盛んなもので、庵中に栝椽さかのほ(まげもの)を見るやうな大臘燭の半ヶ月も燃えつづけるものを獻じ、神誕の前後數日は、近郷の農民たちは、神前に牲醴せいかいを供へ、又神像をかついで街を練りまはること前清時代そのままである。郊外のある地方では、神像をかついで飛ぶが如くに疾走し、過つて歩き引つくりかへつたりするのを、かへつて喜び、これを地方語で趣猛將さうまうしやうとよんでゐる(趣は音市語、蘇州方言で急に走るの意。又、一周するの意)

猛將が蝗驅除の神で、旱天に雨を禱れば、又これに應ずる田園保護の神である

ことは、固く農民の間に信せられてゐるところで、それに一點の疑ひもないが、猛將そのものが如何なる神なるかは異説が多い。宋の名將の劉錡（武穆）であるといひ、錡の弟の銳であるともいふ。いづれにしても、南宋の紹興年間の名將で武功もあり、地方民の信頼をも得てゐた劉姓の人たるは確かだ、嘉定縣志などは明かに劉猛將とも、劉猛將軍とも書いてゐる、初めは揚威侯と諡せられてゐたのが、宋の理宗の景定年間（1260—1264）に吉祥王を加封せられたといふのが通説である。ただ名だたる武將がいかにして農民加護の、特に驅蝗神となつたかは詳かでないが、「畿輔通志」といふには、神名承忠。廣東の吳川の人。元の末に指揮に任せられて猛將の名があつた。そして江淮一帶に蝗旱ありし時、兵を督して驅除に努力し、どうとう蝗を撲滅した。後、元が亡びたので自ら河に投じて國に殉じたのを、地方人が祠祀したのであると見えるさうである。この劉猛將や、蟲王爺の外にも驅蝗の神はありさうである。現に民國二十七年出版の「京津風土叢書」

の天津楊柳青小志の神廟の部に見える同處の藥王廟内に祀る螞蚱神は、同書も註を加へて、『俗に蝗を呼んで螞蚱（macha）となす』と斷つてある。これも蝗の神らしくも思へるが、同書には、しかも、土地の人たちは螞蚱は姜太公すなはち大公望の妻であると信じてゐるといひ『吹豳飲蜡』の額が掲げられてゐると附記してゐる。題額の文句からすれば、周の禮俗を禮讚したものであるから、姜太公の妻を神主としたものとも考へられぬこともないが、螞蚱の名は、人名としてはもとより、神名としても甚だ適はしくないやうである。又、周の姜太公なら年老いて後、その妻に逃げ出されたといふことになつてゐる。ここには、迂濶な斷案をさしひかへて、同書の津門百詠の中の一首に、螞蚱すなはち蝗と蝦蟆とは津門人の二好物なりと註してある近代人の詩を附記する。蝗の味は香ばしくて美、小蝦の如しと「和漢三才圖會」に見え、わが國でもこれを嗜むものがあるのは、説くにも及ぶまい。

居人頓頓飽魚蝦
一物終難免嘔吐

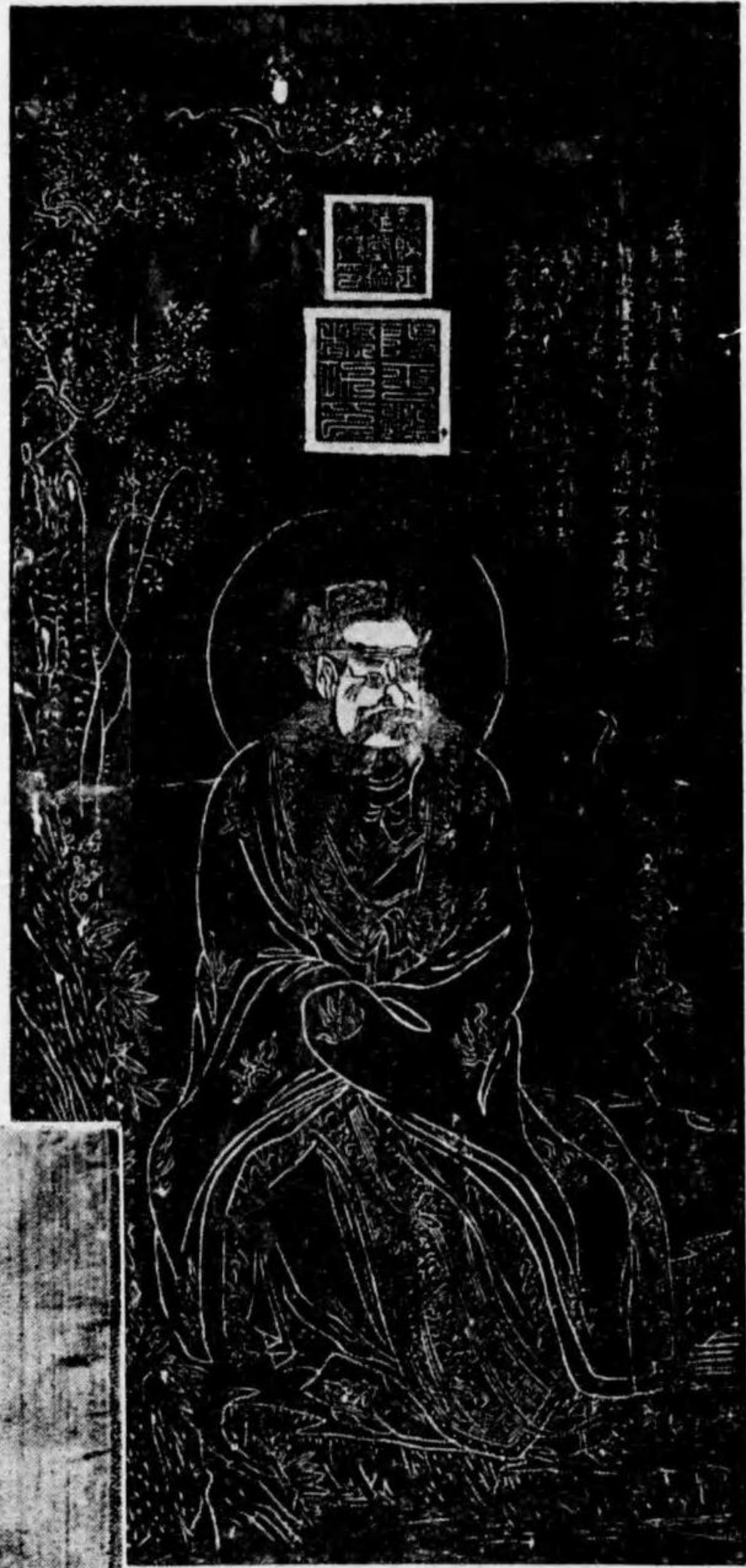
燭食飛蝗野味誇
未緣習俗近蝦蟆



→ 大奶夫人像「三教挿神大全」に挿まれたる



← 二郎神像「三教挿神大全」に挿まれたる



→ 張道陵畫像—張天師より頂戴したる



← 道教護符—張天師親しく黃絹に書いてくれたる

張ちやう 天てん 師し

『鬼迷張天師』——物事が行詰つて施すに法がないとか、よく分つてる筈なのに、却つて迷つてゐる。すばらしい手腕があるのに失敗したといふやうな場合に、吐き出すやうな語氣を以て、上海あたりの人は、よくこの俗諺を用ふる。張天師といふのは、江西省龍虎山に本山を構へて、東漢の張子房が八世の孫の張道陵りやうから、現代の天師にいたるまで、道統ここに六十三世、二千年の昔から今日にいたるまで、降妖捉怪の法力を有する超人と信せられて、つねに幾百萬の民衆から最高の敬意をささげられてゐる教主。

あらためていふまでもなく、道教は表向には老子を宗としてゐるけれども、張

道陵の孫にあたる盛が、漢中を逃れて南に走り、今の江西省の龍虎山に根城を築き、正一教即ち古道教を大成した當時から、一種特異な共同團體風のものであつたが、おそらくは高級な宗教的なものでもなかつたらう。そして年代が下るに従つて、ただ符籙ふろくを造り、齋醮さいせうと祈禱を主とする、彼等のいはゆる道術となり果てたものであらう。といつて、これがために支那民衆の信仰を失つたわけではない。特に江蘇、浙江あたりは、漢の茅盈兄弟、梁の陶景宏が茅山に隠れてゐたことと、道書のいはゆる第八洞天、第一福地が、句容の茅山以下、江浙蘇の地に多く、また香火の盛んな道觀も少くないので、その廣く流布されてゐることは、他教とは比べものにならないのである。民國二十七年版の王培棠の「江蘇省郷土志」によると、上海、南京二市を除いて、全省に五千三百の道士と、千四百の道姑とがあり、信徒として計へられるものが、男女六萬二千人に達してゐる、民國二十五年版の姜卿雲の「浙江新志」をしらべると、道教徒と稱するものが一萬五千人に

上つてゐる。ただし、これは公稱教徒の數であり、道士の數である。實際の道教信者は、この數に幾十倍することであらう。

明以前のことはここに略するが、明に入つてからは、太祖まづ道教の流弊の甚しきを認めて『天師』の號を削り『真人』と稱せしめたといへ、なほ二品の秩を與へ、宮中席次を在都御史の下、侍郎の上におかしてゐる。清朝となつてからは、乾隆十二年までは『真人』と稱せしめたが、思切つてその封號を削ぎ去るとともに、朝會參列を停め、わづかに五品待遇に改めてゐる。民國となり、特に國民黨が力を得てからは、道教を以て迷信の一と認め、張真人の權威を否認し、處としては道觀沒收をさへ斷行したものである。かやうに、近代においては、張真人も、その末流も、厄難つづきであり、冷遇されつづけであつたのに拘はらず、妖魔驅除の道術家としての張真人の估券に關するところはなく、民衆もまた未だ曾て彼を無爲無能の平民扱ひはしてゐない。私が初めて張天師を上海佛租界

の梅蘭坊の假寓に訪ふた時、——それは昭和五年七月一日——も、彼は上海對岸の浦東において、新たに建立された杜月笙が家祠の祭祀のために迎へられて來てゐたのであつた。杜月笙といへば、五十萬の結社員を有するといはれる青幫の大親分で、張嘯林や、黄金榮などいふ人物と共に、揚子江下流の地に、素晴らしい潜勢力を有する一種の傑物である。二度目によそながら張天師の姿を見たのは、滿洲事變につづいて上海事變が起つた後、上海第一の大金持の猶太人ハードンが死んで、その盛んなる追悼會が、彼の遺邸たる哈同花園で執り行はれた時だつた。杜月笙といひ、ハードン未亡人の羅迦陵といひ、かやうな人々が天師を祭祀の主役として恭々しく取扱つてゐる實際を見たものには、いかなる政治的壓迫が加へられやうとも、迷信といふものが人間からとり除かれなにかぎりは、將來においても、遽かに道教が衰亡するだらうとは決して思へない。

江西貴溪縣龍虎山の本山詣することなくして、偶然にも上海で張天師を見る機

會があらうとは、全くその時まで思ひかけなかつた。天師上海に來るとの記事と、その間に挿まれた彼の寫眞を新聞で見るとともに、私は直に自動車を假の天師府に乗りつけた。勿體なや、月に六十元は出さうもない路地の一戸で、案内を請ふほど大きな家ではなかつた。すつと入ると階下の正面の客廳には、朱刷の教祖張道陵の畫像と、解朝東といふ人（解氏は彼の讀書の師であるさうな）の對聯が壁にかかつてゐる、その前の香案には、香爐、燭臺などが按排してあつた。いづれも安物の器具ばかり。それもまづ可なりとして、驚いたことには、教祖畫像前を憚らず、室の中央の卓を圍んで類人猿然たる四五のむくつけな男女が、大口を天井にむけて、手に箸を揮ひつつ、今や盛んに大碗から飯をかきこんでゐることだつた。

駱廷藩なる老侍者に伴はれて、しづかに階上から下りて來た張天師は、日本人と語るのを私を初めとするといつた。天師、名は恩溥、字は瑞臨、その時二十八

歳。祖父の名は仁晟^{じんせい}、六十一世を継ぎ、父の名は元旭、六十二世を承^つけ、民國十三年、六十四歳で父が上天したから、自分が六十三世の道統を継ぎ、二千餘年來の『道』を奉じ、三種の『寶』を紹^たいたのである。寶とは、一は寶劍、これを揮つて妖邪を斬るのである。一には『陽平治都功印』とある。一は寶劍、これを揮つて妖邪を斬るのである。一は法書、書の内容は一言にして悉^つしがたいと、私の問に應じて彼は語り出した。天師にはもと兄弟六人があつた。その一人は共產黨のために殺害され、二人は病死、あとの二人の弟は健在で現に讀書中である。清朝の末までは、道衰へたりといへども、なほ各縣に共有田があつた。今はただ田租三百石の収入があるばかりで、天師一家の開支を償ふにも足らぬ。龍虎山の上清宮二十四院が火のために焼けたのは、百餘年前のことで、昔ながらの勝況は、門樓と、鍾樓とにしのばれるばかりである。それに人の心をもたぬ共產匪どもは、先年さらに天師府を洗ふが如くに劫掠して、收藏の胡蘆——多分、法器であらう。聞きもらした——數百

具を、一つあまさず叩きこはした。ただ家を焼かなかつたのが見つけものだつたが——と駱老人が旁にあつて口を添へた。天師の話は江西訛でもあるだらうか、とても聞きどりにくい發音だ。もし駱老人が介添してくれなかつたら、私などはてんで談話は進められなかつたらう。

駱老人は、私の請ふにまかせて、軸物に仕立てた五雷符をくりひろげ、凶事に用ふる太上拔亡經籙全節部四十八卷、吉事に用ふる太黃預修延壽經籙全部七十二卷をも示してくれた。賣りますかど問ふと、賣ると答へて代價をも告げてくれたが、あまり値^ねが張りすぎてゐたので手が出せず、結局、天師親筆の護符を一枚、價十五元を納めて頂戴し、さらに五元を奉つて朱刷の教祖畫像を申しうけるにどどめた。護符は、一枚を肌身につけてゐたら矢でも鐵砲でも、乃至、コレラ、ベストでも決してよりつけないといふ世にもあらたかなものといふ。

天師は中肉中脊、髪頭は丸刈、下ぶくれの面長。その日は淡紅色^{とんきいろ}の長衣に、白

い短袴に、白い靴下、黒い鞋、手には大きな『甲』の字型の鴛毛扇をとり、とても蒸暑い朝だったから、絶えずそれを揮つてゐた。と對坐してゐる間に、小石のやうな大粒の驟雨が、狂風を伴つて吹き降ろし、地面にふっつけ、家の棟をたたき、まつ白な水煙がわれ等の客廳をもどざし罩めた。しばらくは三人とも無言。ただ微笑して雨を見る。雨やや収ると天師が語をつづけた。『法術は私にとつて傳家の秘訣です。一夕にして説き難い。けれども、私は遇ふ所に從ひ機を相して行ふのである。もし龜妖に遇へば龜符を以て、蛇妖に遇へば蛇符を以てこれを捉へる。そしてこの作法たるや、總て是れ祖傳の衣鉢で、千年一律、この中の奥妙に至つては到底口舌を以て陳べ難い。私が符を畫き、劍を揮ふのも、つまるところは、畫家が畫を、書家が書を作るのと相似てゐる。謂はば法における一種の藝術ですよ』

天師は、そのころ、道貌岸然たりとても形容すべき、がつちりとした凡ならざ

る相貌の青年だった。新時代の人らしい語をも交じへて語つたが、しかも、なほ古典的な含蓄があるらしい感じを人に與へた。——それから四年の後、龍虎山にかへつてゐる彼を訪ふた人の談によると、彼の脊はちぢこみ、眼は光を失ひ、鴉片中毒の症状が著しかつたさうな。上清宮には、昔から『滅不滅・絶不絶・六十三代・歇不歇』といふ不吉な諺とも謠ともつかぬ豫言が行はれてゐる。六十三世の瑞齡にいたつて道教の衰微を見るのも、この言ひ傳へと合してゐると、その人がまた私に告げた。

張道陵の裔が、天師と稱したのは、唐の天寶年間のことである。元は至元五年に、三十六世の張宗演を封じて、輔漢天師といつた。明は當時の教主正常の天師の封號を革めた後、正一嗣護國闡祖通誠崇道宏徳大真人に封じた。で、眞人と公稱すべきであらうが、龍虎山の天師が府臺は『嗣漢天師府』と門楣に題し、俗に『衙門』とよび慣はしてゐる、今も一切の稱呼は唐代の昔そのままを襲用してゐる。

天師は別れる時、龍虎山は眞に修心養身の地だ。機會あらば來つて私の客となら
れたい。また、君の筆によつて道教を正しく日本に紹介されたいと、くれぐれも
私に告げるのだつた。

祀き 孔こう — 孔子祭

孔子教は將來においても、東洋教學の光輝であるだらう。孔丘、字は仲尼、魯
の昌平郷に生れた。一時、魯の哀公に仕へて大司寇を拜したが、志を得ずして郷
國を去り、門下生等を率ゐて、十四年にわたる恵まれない流浪の旅に出た。衛に
往き、宋に往き、陳、蔡をも訪れ、又、楚にも赴いたが、彼の説くところの道は、
それ等の國々の實力者に多く顧みられず、隨從せる門下生皆な饑餓に瀕するやう
な憂き目にあつたこともある。哀公の十一年、魯に歸つた後は、専ら帷かを垂れて
子弟に教授した。門下三千人、その中、六藝に通ずるもの七十二人と稱せらる。
堯、舜、禹、周公などを祖述した彼の學説は、彼の後に來れる曾子、孟子、程子、

朱子等によつて繼承された上、二千年間、絶えず複雑な發展を遂げた。又、その一方、彼の教義は、漢より以後の歴代の君主が、その政權維持のために利導し、唐代以後は、官吏登庸試験の唯一の科目とされた。天を説き、道を示し、人倫を明かにしたことは、他の支那思想に比して、彼の教の著しい特異點といふべきではあるが、民衆をひきつける神祕において、道教ほどの蠱惑こわくの力を缺いたことが實際である。けれども、徳治を以て國家的理念とし、仁による天人合一を道德的歸趨とする支那思想が、彼等の頭腦からぬけ切れざる限り、孔子教は後代にも傳統し、孔子は先師として永遠に崇祀されることは疑ふべくもない。

民國に入つてから、反孔教運動が起り、孔子教によつて掩護されてゐる家族制度、婦人問題、文學革命運動などが、次ぎ次ぎに起り、さらに共產主義、三民主義などの新思想運動も擡頭し、專制の遺習打破を志す青年學子の趨ほしつてこれに投ずるものも少くなく、一時は、孔子廟の祭祀も廢絶するかと危ぶまれた。が、民

國二十三年八月二十七日、國民政府と國民黨とは、その時の首都南京において、國祭としての第一回の祀孔奠禮きこうてんらいを擧げ、祭奠委員汪兆銘以下、黨國の官民數百名が參列し、山東の曲阜へは葉楚傖しやうそさうが特派され、全國一齊に式典を擧げた。孔子の誕生日については、古來異論があつたが、國民政府は、公羊傳の十一月庚子かうしせつ説を取らずして、穀梁傳の襄公の二十一年八月二十七日説（西曆紀元前五五一）を取り、これをそのまま陽曆に振替へ、この日を以て國家祝祭記念日の一としたのである。もつとも、孔子祭典を『釋奠しゃくてん』といはずして『祀』といふこと。『孔子廟』と稱して『文廟』と稱せざること、廟内の諸木主の諱いみなを避けたものは、正しく諱に書き改めること、禮器の數、樂章などは、大體、前清時代の制に則ること、等等は、民國三年袁世凱の大總統たりし時、すでに制定されてゐたのである。

漢の高祖の十二年、高祖、魯を過ぐるにあたり、大牢を獻げて祭つたのが、祀孔の最初となされてゐる。西曆紀元前一九五五年のことである。高祖は寛大な點に

缺けた人物ではあつたが、内治には意を致し、儒學をも獎勵したのである。後漢の明帝の時には、郡縣の學校に令して、周公と孔子とを祭らせた。隋の文帝は、國子等に詔りして、毎年春秋の仲月に先聖先師を釋奠し、郷飲酒禮を行はしめた。これが丁祭すなはち二月および八月の丁日に孔子を祭る始まりで、民國二十三年まで、一千三百餘年を通じて、支那各省府縣の文廟ごとくこれに従つて持續したのである。滿洲國は今日もなほ依然として、陰曆により、また、古制の丁祭によつてゐる。唐に入てからは、貞觀四年、郡學に令して文廟を建てしめ、先聖尼父と諡し、丁祭を普く行はしめるとともに、亞聖顏回をも配享せしめ、さらに開元二年には文宣王に進め、後また大成至聖父師文宣王と改めた。宋には太祖の建隆元年に、祠宇を修理し、先聖先師像を塑繪せしめ、眞宗は、大中祥符元年に玄聖文宣王と諡した。玄聖といふのは、孔子の母、黒帝に感じて彼を生めりとの説があるので、莊子に恬澹玄聖素王の道の句あるのを取つたので、著しく道

教臭を帯びてゐるといはれる。黒帝といふは、蓋し天神五帝の一で、北方に位するものである。眞宗はまた翌年に孔門七十二子をも追封し、つづいて左丘明等の十九人をも配享し、又、五年には玄聖の玄を『至』に改めたりしてゐる。その後の宋、元、明、清いづれも尊孔には恭々しさの限りをつくし、清朝の最後に近い光緒年間にも、祀孔の中祀を大祀に上してゐる。

北京の孔子廟における祀孔禮制は、今日も、多分、民國三年九月頒行の禮制によつてゐるのであらう。時代の變遷によつて燕尾服の陪祭官もあることで、若干の現代化は免れないところであるが、儀式の大體は唐以前の古制を參酌して成れるものと傳聞する。滿洲國のそれは何によるか明かでないが、大清通禮の定むる所に重きをおいてゐることは察せられる。その第一回の祀孔は、大同二年の秋の丁祭で、この時は國務總理鄭孝胥が欽派されて祭主となつた。

あつしんせん　くわいしんせん
軋神仙・會神仙

蘇州切つての藥店沐泰山が、まだ今日の繁昌をいたさなかつた同光年間のことである。年のころ三十ばかりの女乞食の、瘡だらけの幼兒を背負つたのが、毎朝、沿路物を乞うて、午ごろ彼の店頭立つのがあつた。乞食は百結の鶉衣に蓬々たる梳らざる髪、きたない身なりをしてゐたが、顔色朗らかで、すみきつた眸をもつてゐた。子供も瘡だにできてゐなければ、圓つこく肥えて愛らしい面ざしであつた。が、その子の頸には、稻藁でこしらへたこの子を賣るとの『柴結』の記號をつけてゐた。沐泰山の主人は、年老いて子がなかつたので、その母と子が氣の毒でならず、門口に来るごとに、飯を施してやつた。さうしたことが一ヶ月

も續いた後、激しい風雪のある日、店主は、飯をくれた外に子供に衣帽を與へ、母には錢百文を恵み、けふは寒さがひどいから、店の隅で休んでゐてもよい、夜は寝てもよいといった。翌朝、主人が起き出て見ると、乞食は無遠慮にも子を抱いて櫃上に座つてゐ、主人に向つて、別に禮を述べるでもなく、市井の間にあなたのやうな人があるとは意外だつたといつて、掌で子供を三度叩いた。すると、子供の腹が變な音を立てると思ふ間もなく、汚いものを櫃中に垂れおとした。店員どもは乞食親子の無作法を怒つた。それでも主人は腹を立てず、拭つたらよいと寛大であつた。店員は已むを得ず、中つ腹で穢物を拭ひかけた。と、まだ半を拭ひ去らないのに、不思議や梅檀のやうな奇香が、ぶんぶんと室に盈ちわたり、五色の慶雲が下つて來た。と、また、乞食の姿は一道姑に、幼兒は一個の葫蘆に變じ、冉冉として上天するのであつた。蓋し乞食は神仙で、子供の糞は葫蘆中の仙丹であつたのだ。沐泰山はかくして、拭ひあましの得難い仙藥によつて、富を

成す素地を作った。

それに類似した話は、同じ蘇州の有名な食料品店陸稿薦りくかうせんにもある。同店がまだ兵馬司橋にあつた同光のころのことといふ。蓬頭垢面の、一足は跛の、背には一鐵罐を負ひ、腰には破れ蓆ひじろをくくりつけた穢らしい一乞食が、家毎に錢を乞うて、陸稿薦にも來るのだつた。穢いばかりでなく、言語態度ともに不遜な乞食だつた。けれども、店主は佛教の篤信者であつたから、來れば必ず飯と、烹物の剩りものを施すのを例とした。ある降雪の日、店主は乞食に向つて、屋内に入り爐に近くゐよといつた。雪は三日つづいた。乞食は憚り氣もなく、その間、蓆を暖かな爐邊にしいて寝そべつてゐた。そして霽れると、別れの言葉をも述べず、破れ蓆を遺したまま姿を消した。春さきになると、その蓆から無數の虱がわき、蠕じゆ々としてそこら中に這ひ出した。始末に困つた店の者が、その蓆を焼き棄てかけると、忽ち奇香を發して店内から街上に溢れた。街の通行者は、その香をかいで

食欲をそそられ、續々店内に入つて物を食つた。食品は他の處で食べる物よりはるかに美味だつた。これより陸稿薦の商賣は繁昌する一方で、店を移轉するごどもに、乞食の蓆を記念するために家號を『稿薦』と改めた。蓋し乞食は八仙の一人李鐵拐であつたらうといふのである。

支那人だけしか耳を傾けないだらうところのこの種の話説は、蘇州にかぎらず、又、著名な藥店と食料品店にかぎらず、南北いづこにもあり、富豪とか舊家とかには多く附きものの形となつてゐる。それが大衆を對象とする商賣である場合は、宣傳、廣告の機關がなかつた時代としては、かやうな夢みたいな物語に假託する外はなかつたらうと思はれもする。しかしながら、同じ宣傳の目的に出づるにも、何故に乞食、瘋癲ふうてんとして姿を現じた神仙を假り來るか。その點に、支那的特異の研究すべきものを認むべきやうである。一言にして蔽へば、それは道教の影響からであらう。更らに進めていへば、かの『會神仙』とか『軋神仙』と

かいふものが、知らず識らずの間に、深く人心に入れる結果であるだらう。

蘇州の閻門内の呂祖廟では、四月十四日の呂祖誕を單に神仙生日とのみよびなして、盛んな醮會を營む。清朝時代には官祭を賜うたさうである。呂祖廟はいづこにもあるが、ここのは來歴が古いらしく、宋の淳熙年間この日、胸山王の某といふが、呂祖から神方を授かつて風疾を療した傳説があり、元以前の崇祀にかかると記録も残つてゐる。この日、市民は米の粉で五色の團子を作り、神仙饊と名づけて慶び、廟に詣でたものは、神仙花とよぶ龍爪荔（劣等な一種の葱で、食品のくさみとする）や、その他の花卉やらを買つてかへる慣ひである。又、その前夜あたりには、千年薑とて、薑の葉をもぎとり、延喜を祝ふて（薑は運に通ず）街路に撒く。又、薑は薑と通音で、青とか緑とかを意味し、又、與ふるの意もある。が、實は何でもない、おもとの屬の赤い實をつける平凡な植物である。これだけの祭禮に關する民俗ならば、別に取立てて記すほどのこともないが、ここの祭には、

一般市民の外に、純陽の徒子徒孫と稱する醫者、星相卜筮の術者、鼓樂を業とする者、青樓脂粉の女どもは、必ず一點の『仙氣に軋する』ために、又、奇疾を有する病人と、畸形癱殘の乞食等とは、誠を致すことによつて仙人の救度を求め得るものとして、必ずこの日を限りて相率ゐて進香し、廣くもあらぬ街道から廟内まで、『軋神仙』と稱する特殊な雜踏と奇觀とを演ずることを特筆する必要がある。軋の字、音は輓。本字は勑。吳人は凡に作る。軋は方言の軋朋友、軋妍頭などといふ際の軋と同じく、つき合ふ、出會ふ、接するなどの意で、他の字では現しがたい軽い微妙な意を含んでゐる。信徒と病人、乞食の參詣は、まだ可いとして、その間には不良少年、少女、巾着切りの徒も雜る。従つて一種の陋俗を成してはゐるが、一奇觀たるには相違なく、次に述べる北京白雲觀における『會神仙』と對をなしてゐる。

白雲觀は、北京第一の道觀で、又、唐代の建立にかかる最古のものである。靈

官殿、丘祖殿、后土殿、呂祖殿、子孫殿などの殿堂棟宇相接し、その規模の廣大にして複雑なること、道士の数の多いことも、他にその比を見ない。この縁日は、例年正月一日から開かれて十九日に至りて止むのであるが、人出が盛んになるのは十五日からで、十八日の會神仙の夜に至つて頂上に達する。上は顯官、大賈、優伶、妓女、遊び人、いんちき師、みな此の夜の三時を中心に押すな押すなと參詣する。皆な神仙に出會つて仙縁を結び、病めるものは疾を除き、病まざるものも壽命を延ばし、多くの幸福を得んとする願ひからである。「燕京歲時記」は、次のやうに最も要領よき解説を與へてゐる。「相傳ふらく、十八日の夜内、必ず仙眞ありて下降し、或は遊人と幻じ、或は乞食と化す。縁ありて之れに遇ふ者は、得て以て病を却け年を延ぶ。故に黃冠羽士三五羣を成して廊下に跌坐し、以て一遇を冀ふ。究むるところ、その遇ふと遇はざるとは知らざる也。」

下降する眞仙が、參詣の遊人として現はれるのならまだしも、乞食と化して、

人から汚ながられ、嫌はれる姿において現はれるといふから厄介千萬である。それに眞仙なるものは外形の美醜と、行爲の如何に拘はらず、神佛に對する誠虔の心を見込んで、その人に特別な幸福を授けると説かれてゐるのである。前に擧げた蘇州の藥種商や、食料品店に降臨した神仙類似の行爲が、この白雲觀にも無論、澤山傳へられてゐる。が、大體の筋としては、乞食に與へて食はしめた餛飩を、乞食が食ひ終れる後、店先の鍋の中に吐き出して去つた。店の主人は怒つた。が、それからといふものは餛飩は賣れども賣れども、鍋の底から湧き出て盡きなかつたとか。廟の後に小屋がけてして蓆を賣るものが、客足がつかないので案じこんでゐると、いつの間にか腿のあたりに瘡を病める老道士が來て、何の斷りもなく蓆の上に寝てゐた。氣の好い蓆賣りは、別段咎め立てもしなかつた。老道士はいつの間にか立去つた。あとで氣がつくと、彼が寝てゐた一枚の外、どの蓆にも李鐵拐の圖像がゑがかれてゐた。そこで蓆は飛ぶやうに賣れ、蓆賣りは富を

成したとかいふ類の、多くは同巧異曲の童話然たるもの。従つて大衆には信せられ易くもあるわけである。といつて、大衆だけでないから決して一噓きよに附してはならない。神仙は不死、千年前の仙人も、時ありて現代人に交渉を有するとの思想は、廣く支那人の上下に行きわたつてゐる。筆者は、清末の學者で、光緒帝の師傅だつた陸潤庠りくじゆんしやうが、右の呂祖廟で、祖師が老丐らうかいに化して夜壺よかひ（溺器）を枕にして寝てゐたのにめぐり合つた實話？を、その孫女まごむすめにあたる教養ある婦人から聽かされたこともある。笑つてしまつたら、支那人としつくりした交際はできない。

石いし 敢がん 當たう

石敢當——いしがんどうとも、しつかんどうとも讀む。三四尺ばかりの高さの石碑に、この三字を刻みつけたのを、わが九州の肥後、薩摩あたりで見うける。多くは路のつきあたり、又は、人家の正門の角に建ててある。わが「西遊記」の著者たらはな橋南谿なんけいは、鹿兒島の城下町で、この小石碑を見かけたとして『鹿兒島は日本の極西南に在りて唐土に近く、むかしは船の往來も自由なりしかば、彼の地にてかやうの事も見及び來りて、此の地に作り置きしにや』と、疑ひを存しながらも、徳川氏の鎖國以前に、支那の俗の傳來したらうことを認めてゐる。

唐土の俗信をまねびてのことらしいのは、石敢當の三漢字を見ただけでも、容

易に推定されるが、何故にと、その意味を溯つてただすことになる疑問も生ずる。異説も出てくる。わが國の現代の土俗學者の中には、石敢當を一に『はかり石』と名づけるところから、一種の信仰から起つたもの。即ち祈願あるものが、兩手でこの石を持ち上げ、その輕重の感じによりて、心中の願ひの成否を卜ふ『石占』の具だと説くのもある。これも根據を有する説かも知れないが、これを動かす、持上げるには、極めて適はしからぬ場處に建てられ、且つ動かし、轉ばすことのできないやうな用意においてその基礎を固めてあるのを見れば、後代に見る事實としては、石占の具に充てられてもゐず、その意もない。少くとも石占の用具たりしとの説は通説でない。

試みに、最も廣く行はれてゐる「辭源」について見ると、支那においては、里巷に立つる石で、不祥を禁厭するもの。石敢當の三字は、始めて漢史游急就篇に見ゆ。顏師古曰く、敢當は當る所敵無きを言ふなりと。又、おもへらく、急就の

例は首めに諸姓を陳べてある。その名字は、或は新に義理を構へたので、實は相配屬したのでなく、眞に石敢當その人がゐたのではなからう。蓋し二字を虚構して石姓と相配しただけのことなのを、後世の人が石に鑄つて禁厭の用としたのであるとしてゐる。又、「辭源」は、わが國の諸書にもよく援用されてゐる宋の王象之の撰である「輿地紀勝」と「繼古叢編」との二書を擧げて、上記の解説を補ふてゐる。

慶曆中(1041—1048)張緯。莆田を宰す。縣治を新たにすとして一石銘を得たり。

その文に曰く、

石敢當、鎮百鬼、厭災殃、官吏福、百姓康、風教盛、禮樂張。唐大曆五年 縣

令鄭字記 (輿地紀勝)

吳民の廬舍、街衢直衝に遇へば、必ず石人を設け、或は片石を植ゑ、石敢當と

鑄りて以て之を鎮む。急就草に本くなり (繼古叢編)

唐の大暦五年は、西暦七七〇年にあたる。莆田は今の福建省の厦門アモイに近いところ
で、唐代の古城の所在は現在の縣治の東南方にあたるが、いづれにしても、十
八世紀には、この南海地方において、厭勝と保障との二重の意で、石敢當は官公
衙にも建てられたらうことが考へられる。同時に、五代の漢の高祖劉智遠の力士
に石敢當なるものがあつたとの説の正否は自ら明かである。五代は百餘年も後の九
〇〇年代だから。

わが國においては、又、支那においても「辭源」が擧げた右の二書の外に、明
の陶宗儀（浙江天台の人）の「輟耕錄」を援いたものが多い。けれども、この書
の記載は、繼古叢編の文句に顔師古の注を附記しただけに過ぎず、ただ纔かに吳
地の外に、彼の郷土の浙江東部においても、明代に石敢當を建つる俗ありしこと
が知られるばかりである。

日本、支那を縦斷する如上の諸説を、大體、通説なりとみて差支へないやうで

あるが、しかも、現代支那の青年學徒の間には、それだけでは満足しかねるらし
く、をりをり民俗學關係の雜誌や、新聞の學術欄などに、石敢當研究の記事論文
を載せてゐる。別に新発見らしいものもないやうであるが、處を異にするに隨つ
て多少づつ異なる傳説の中には、やや面白いのがある。

現に四川に見るものは、碑頭に人の顔とも見える眼、鼻、口を具へて、その額
にあたるどころに『王』の字を、下部の臺座に、横に三個の波紋狀を刻してある。
そして朔望さくぼうの日に逢ふごとに、香燭を焚き、紙錢を焼いて敬意を表する。

揚州においても、碑の形狀は相違するが、敬意を表することは前と同じであ
る。

儀徵、鎮江にも見うける。その中には、石の上部に八卦を彫刻したのがある。
廣東の石敢當は、人家の牆下に蹲うづくまつて、人の香火をうけもするが、また、狗尿
猪糞を浴びてもゐることは、他の地におけると同じである。が、郷中の父老は、

神座が墻下にあるからとて、福分が浅い神ではない。石敢當の高貴なる點は、一度坐つたら、泰山の石だけが、やつとこれに當り得るのだからといつてゐる。以上、樊纘なる人が、廣東中山大學の「民俗」に供給してゐる材料である。彼は、又、廣東の高雷半島の徐聞縣で採集した傳説を寄せてゐる。——縣公署の前面の大門に、太山石敢當の五字の碑がある。土地の人のいふところを聞くと、清の康熙年間に、ここに來任する知縣が、まだ幾月もたたぬのに、次々に在任中に死ぬるので、不祥な噂が立つた。新に來任した黃姓の知縣は、豫めその事情を曉つてゐたので、土地で有名な堪輿先生(かんよせんせい)（古くは五行家に列す。堪輿は天地の總名とも、神の名とも考へられた。今日は、方位や、地を相する者を堪輿家とよび、その言を風水といつてゐる）を同伴して縣公署を勘考してもらつた。と、彼は、この縣城内に建てられてゐる風水寶塔の影が、あだかも知縣の公座の上に落つるやうになつてゐる、死んだ知縣たちは、すべて寶塔の壓力に勝へなかつたのであると説い

た。そして彼は縣公署の正面に石敢當を立てさせた。泰山の力は能く寶塔の力にあたるに足ると信じたからだ。黃知縣は果して無事に任を了へた。その後、相傳へて現に見るが如くである。

張文煥なる人の、同じ「民俗」に、福建省南部で行はれてゐる傳説を寄せてゐるのは、著しく小説めいてゐる、また、道教の臭が高い。その大略。

古の洛陽の錦驛鎮の渡口に、姓は石、名は敢當といふ野菜賣の男がゐた。黃瓜や菜つ葉を筐(かご)にして渡し場まで行くと、花塊石の揭示文をとりかこんで、黒山のやうな人ばかりである。勝手なことを口々にいつてゐる人の語に聽耳をたてるど、何とありがたいことではないか、郡主さまが、この三日間、二十艘の船を出して、その一艘に玉のやうな美人を載せておかれる。誰にもあれ、錢を打つつけて美人にうまく中(あ)てたら、中てた者に美人をどらされる、宿の妻にするよし、側室にするもよしといふのぢや、といふのである。年をくつた老爺が、わしは錢をつ

かはないで、眼の正月だけにしておかうといへば、中年の商人らしいのは、錢は惜しくない。わしは妙手だ、きつと擲げあてるよ、そしたら、美人はさしづめこのわしの小星といふものかな。とませかへす騒ぎである。石敢當は暗に想ふのであつた。おれもこの年齢だ。もし擲げて中てたら、勞せずして美人の妻が得られる。一生の宿願がそれで早速に叶ふのだ。よし、よしと、その日は匆々に荷を賣つて家にかへり、蓄へた錢をかぞへて、その日の來るのを待つた。いよいよ當日となれば、渡口のあたりは人で填つてゐる。江中を見ると、連環陣を排した二十艘の中の一艘に、一座の彩樓を高くしつらへて、その中に花のやうな美人が、いとあでやかに笑をふくんで坐つてゐる。彼女をわが手にと願ふ野心家どもは、先後を争つて次々に前に出で、錢をつかんで彼女を狙つて投げつける。一として彼女に中るのはない。石敢當も、我れこそと投げた。中らない。たちまちにして錢がつきた。がつかりしたが思ひ切れず、彼は家にかへると、なけなしの家財衣

類を入質し、翌日を待ちかねた。と、隣里の一老人が、黒い狗と黒い鶏とを殺して、その血を一しよにしてこね、一丸薬として投げて見よ、必ず效顯があらうぞと教へてくれた。彼は教への通りに試みた。果せるかな、烏丸は美人の雲鬢にはたと中つた。大衆の喝采叫喊がごよもす中を、むさくるしい野菜賣は、彼女を橋頭に迎へて、夢心地で家の方へ歩いた。生れ落ちてからその年齢まで、まだ一度も女性に觸れたことのない彼であつた。で、肩を並べて歩く間に、彼女の白い手が握りたくなつた。そして彼がひたとより添うて、鼻を撲つ體臭にうつとりしかけた途端、彼女は一指を擧げて、軽く彼を路邊の石壁の方へつづいた。よろけて壁に背をもたしかけると、どうしたことか、彼の體はそのまま壁中にめりこんでしまつて、幽魂風の如くに去り、呆然として再び動けなくなつた。蓋し美人は觀音菩薩の化身で、彼の多情を憫み、彼を封じて水陸守護神となし、未來永劫、首を俯れ心を安んじて壁中に住み、且つ橋邊にあつて、人民保護の責にあたらし

先師孔子行教像



德性天地通冠古今
利達六經垂志萬世

← 孔子畫像—唐吳道子筆



→ 老子像—「列仙全傳」に挿まれたる

められたのである。

石敢當—武昌黃鶴樓下の城脚にある



→ 增福財神像—北支那農家に見る

祝しゆく 由いう 科くわ

自ら醫と稱してはゐるが、斷じて普通にいふ醫師ではなく、道士かと思へば道士でも決してなく、一種の奇怪な加治祈禱かぢきたうを業とし、藥をも處方したりするものに祝由科といふがある。上海、天津などの南北の大都市にも、その看板をあげてゐるものがあり、新聞紙上に自身の肖像を挿入して、厚かましく、最大級の形容詞満面の自家廣告を掲げたのさへある。廣告の文面は、長短の差はあるけれども大體、一定の型があるやうである。彼等はきまつて、靈符を用ゐて、湯藥刀鍼たうやくたうせんを用ゐず、移花接木の法を用ゐて、樹木鶏犬をして代らしめ、何の苦痛をも感せしむることはなくて、人間一切の病症を治すといふを初めとし、生死の病源も、吉